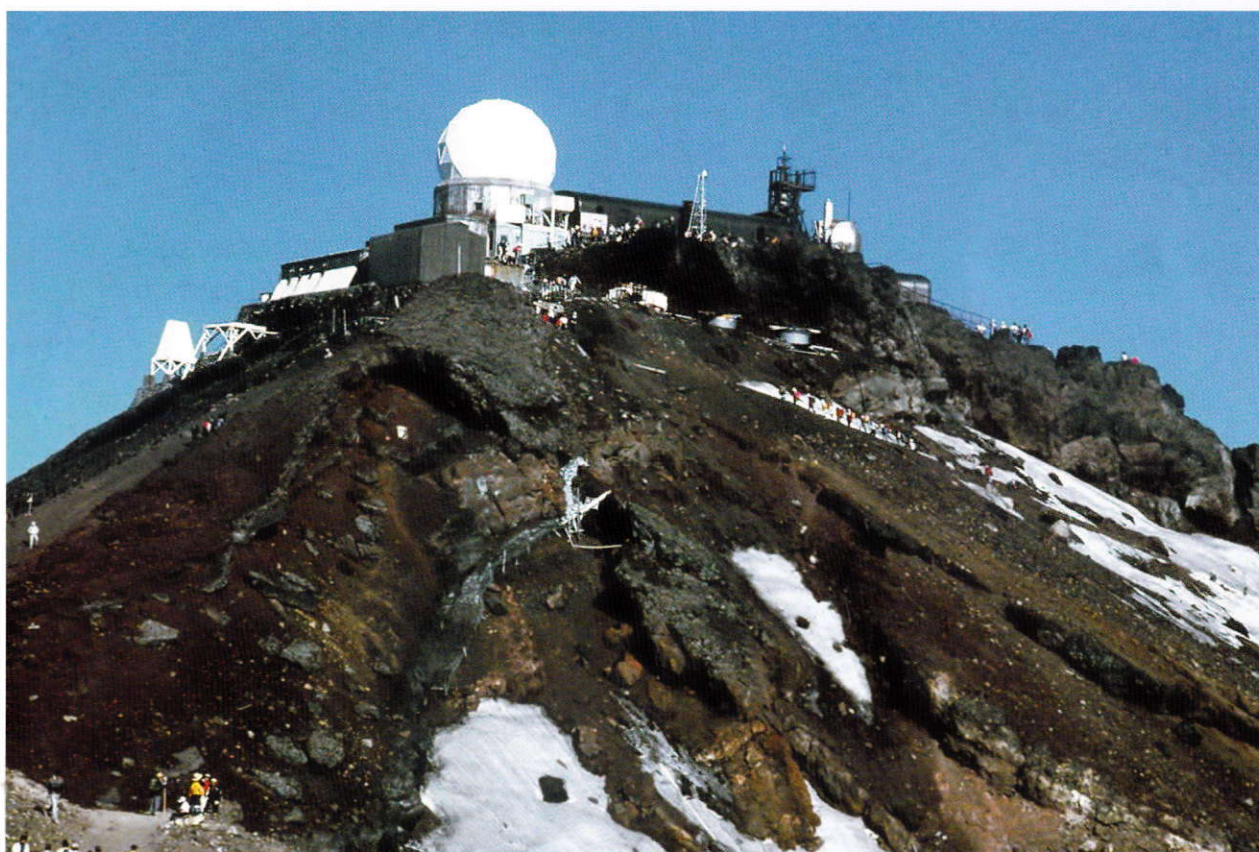


富士山測候所

—日本の気象観測を支えた人々—



日本上空をにらみ続けた富士山測候所

平成16年度

裾野市教育委員会／裾野市立富士山資料館

はじめに

富士山のシンボリック的存在であった富士山頂レーダーを守るレーダードーム、平成14年の秋をもってレーダーによる気象観測が終了したことにより、レーダーを守っていたドームもはずされ、現在は富士吉田市によって保管展示されています。さらに、平成16年9月には富士山測候所が無人化され、山頂観測所の勤務もなくなりました。

昭和7年に富士山頂に中央气象台臨時富士山頂観測所が設立され気象観測を開始、昭和10年に政府事業として山頂観測所を維持することが認められ、それ以来多くの人々の手によって守られ、富士山頂における日本の気象観測が継続して行なわれるようになりました。

富士山頂における気象観測は日本の天気予報に大きな役割を果たし、なお昭和39年に完成した山頂レーダーによって、日本本土の約80パーセント、レーダーを中心に半径800kmにも及ぶ観測網をカバーするようになってからは、まさに日本の気象観測の中心としてその役割を果たしてきました。

今回、平成16年9月で富士山測候所が無人化され、その役割を気象衛星などに引き継ぐことになりますが、今まで長きにわたり日本の気象観測の中核として活動し、さまざまな貴重な気象情報を提供してきたその実績と、富士山測候所を365日休むことなく守ってきた山頂勤務員の活動を紹介します。

も く じ

I. 富士山での気象観測の始まり.....I	7. 芹沢早苗氏25
II. 富士山測候所の果たした気象観測.....7	(1) 富士山頂写真集より25
1. 富士山測候所建設の歴史.....7	(2) 山頂勤務の思い出25
(1) 富士山測候所と御殿場.....7	8. 長田昭典氏26
① 御殿場口登山道の開さく.....7	9. 伊倉範夫氏27
② 御殿場市(御厨町)の発展.....8	10. 芹沢茂嘉氏28
③ 御殿場馬車鉄道の建設.....9	11. 神戸良市氏28
④ 御殿場の観光10	12. 大胡田警吾29
⑤ 富士山頂気象観測と御殿場12	13. 田代忠作氏30
2. 富士山測候所の勤務と観測機器.....16	14. 永井 亨氏31
III. 富士山測候所を支えた人々19	15. 勝又好孝氏32
1. 殉職された方々19	16. 堀江幸雄氏32
2. 野中 至19	17. 平井泰世氏33
(1) 「芙蓉の人」より～野中至の決意～.....20	18. 中島 博氏34
(2) 「芙蓉日記」より～山頂から退く～.....20	19. 滝沢袈裟夫氏35
(3) 「芙蓉の人」より～その後の野中夫妻～.....20	20. 西島 昇氏35
3. 佐藤 昭氏20	21. 中田 晃氏35
(1) 歌曲「芙蓉の人」.....21	22. 岡野 潔氏35
(2) 曾祖父與平次の茶屋21	23. 交替勤務の一日36
(3) 與平次と千代子21	24. 有人観測ごくろうさん会38
4. 佐藤順一22	IV. 山頂における有人気象観測の終焉と 今後の気象観測.....39
(1) 佐藤の凍傷22	V. 特別展をふりかえって.....41
(2) 富士山頂観測所設立へ22	VI. 出品目録42
5. 外山 清氏23	あとがき43
(1) 東安の河原観測所の建設23	
(2) 剣ヶ峰観測所の建設23	
6. 藤村郁雄氏24	
(1) 観測継続を勝ちとる24	
(2) 観測機器の改良24	

I. 富士山での気象観測の始まり

日本の気象観測の歴史を追いながら、富士山での気象観測の歴史を追う。

1. 日本列島は北半球の中緯度にあり、地理的環境が日本の気候を、四季折々変化に富んだものにしています。

自然災害は日常生活を混乱させます。大きな災害から、被害を最小限にとどめるために気象観測は重要な役割を果たしています。災害の防止・交通の安全・農業や産業など社会生活が多様化する中で観測・予報が日々進歩しています。

日本の気象略年表

西暦	年号	台長長官名	主として中央官署来歴	気 象 史 項 目	災 害 地	富 士 山 測 候 所	
						観測所長	気 象 史 項 目
1875	明治 8		東京気象台 (赤坂葵町3番地)	気象観測業務開始			
1876	明治 9						
1877	明治10		荒井郁之助、内務省地 理局に入る				
1878	明治11		測量課長となる				
1879	明治12						
1880	明治13			「気象観測法」刊	横浜強震		メンデルホーン他 山頂における重力の強さを測定、気象は 2時間ごとの気温・天気を調査した
1881	明治14						
1882	明治15		麹町区旧本丸北桔橋構 内に移転	東京気象学会結成			
1883	明治16			気象電報 暴風警報開始			
1884	明治17			天気予報開始	凶作・低温		
1885	明治18		荒井郁之助、地理局第4 部長				
1886	明治19		荒井郁之助、地理局次長				
1887	明治20		中央気象台と改称 気象台測候所条例	北尾次郎「颶風論」	8/19皆既日食 (新潟県)		トット(米国)クニッピン 正戸豹之助 皆既日食にさいし 山頂における気象の変化を調べる
1888	明治21		荒井郁之助、地理局気象 課長	大日本気象学会創立	磐梯山爆発		中央気象台 30～50日毎年夏の間気象観測を実施 このころ より8・9月の夏期における高山植物観測始まる(富士山・御 岳山・石鎚山等) 富士山は中村精男が(8月1日～9月7日)まで 行う 観測所は山頂の北東の久須志岳附近
1889	明治22			和田雄治初めて気象の国際会議に出席 (パリ)			

西暦	年号	台長長官名	主として中央官署来歴	気 象 史 項 目	災 害 地	観測所長	気 象 史 項 目
1890	明治23	荒井郁之助 (初代)	中央気象台管制公布 荒井郁之助台長就任				
1891	明治24	小林一知 (第2代)		クニッピン満期解備	濃美大地震		
1892	明治25			鈴木金一郎 水銀晴雨計を作る			
1893	明治26			「大日本風土編」刊			
1894	明治27			小鹿島果「日本災異志」刊	西日本大干ばつ		
1895	明治28		中央気象台は内務省より 文部省に移管				
1896	明治29	中村精男 (第3代)			三陸大津波 東北凶作		
1897	明治30			小出房吉「日本気候学」刊			
1898	明治31						
1899	明治32						
1900	明治33			気象練習会開始			
1901	明治34		「中央気象台一覧」初版刊	岡田武松「近世気象学」刊			
1902	明治35						
1903	明治36						
1904	明治37						
1905	明治38			中村精男 国際気象協会の常置委員となる	明治38～39年 東北凶作		
1906	明治39			佐藤順一 推算気圧につき論ず			
1907	明治40						
1908	明治41			岡田武松「気象学講話」刊	明治41年～大正 2年浅間山活動		
1909	明治42			軍用気球研究会設置			
1910	明治43			和田雄治 古代朝鮮の気象観測につき発表	関東大水害		
1911	明治44			藤原咲平 音響の異常伝播の研究			
1912	大正元	岡田武松 (第4代)					
1913	大正 2			東亜気象台長会議（東京）	北海道大凶作		
1914	大正 3						
1915	大正 4			安藤廣太郎 東北区冷論発表	桜島大爆発		
1916	大正 5						
1917	大正 6				東京湾台風高潮		
1918	大正 7						
1919	大正 8			藤原・関口 3000m推算等圧線と日本の天気			
1920	大正 9		麹町元衛町（現在の 竹平町 大手町）に移転	海洋気象台 高層気象台創立			
1921	大正10			中央気象台で測風観測開始	全国的水害		
1922	大正11			測候技術官養成所設置			
1923	大正12			地震観測業務充実強化推進	関東大震災		富士山頂で天気予報を行う
1924	大正13			中央気象台に無線電信発信装置を完備 岡田武松サイモンズ賞			
1925	大正14			堀口由己・沖縄台風の研究 東京放送局より天気予報放送			

西暦	年号	台長長官名	主として中央官署来歴	気 象 史 項 目	災 害 地	観測所長	気 象 史 項 目
1926	昭和元	岡田武松 (第4代)		藤原咲平「雲を掴む話」刊	十勝岳噴火、泥流		佐藤順一 山頂東安河原に私設気象観測所（鈴木靖二氏寄附）にて17年ぶりに山頂の気象観測実施
1927	昭和 2				丹後地震		佐藤順一 他 沼津 甲府測候所 中央気象台から多くの職員が登山し佐藤の観測を助けた
1928	昭和 3						佐藤順一 富士山頂の気圧と気温の相関を論ず
1929	昭和 4			中央気象台で雷雨警報開始			佐藤順一 協力梶房吉 真冬の山頂観測の実施
1930	昭和 5			渡辺・石丸・測雲報告	北伊豆地震		下山のとき、佐藤凍傷で入院
1931	昭和 6			岡田武松「Climate of Japan」刊	北日本凶作		佐藤順一・谷本誠（1～18日）藤村郁雄他3名（1/18～2/1）中山丘他2名2/3～2/12山頂の冬季観測
1932	昭和 7			1932年8月～1933年8月第2回極年	北海道凶作	岡田武松 (在年数3・7)	中央気象台臨時富士山観測所 国立の観測所が山頂に開設（昭和7年は第2回極年に国際協同極地観測事業として実施）
1933	昭和 8			満州国に中央気象台創立	三陸大津波		第2極年の終わった以降は三井報恩会の寄附によって維持された
1934	昭和 9			「天気と気候」創刊	室戸台風 凶作・干ばつ		
1935	昭和10						政府事業として山頂観測所を維持することが認められた 名称が中央気象台富士山頂観測所となり富士山頂剣ヶ峰に移転
1936	昭和11					菅原芳生 (在年数2・9)	
1937	昭和12			阿部正直 英文で「富士山雲の研究」			
1938	昭和13			量的予報開始 中谷宇吉郎 人口雲をつくる	神戸大水害	藤村郁雄 (在年数6・2)	
1939	昭和14		国営移管完了	阿部正直「富士山の吊るし雲とその機巧」 (気象集誌)翌月「富士山雲の分類」発表	西日本干ばつ		
1940	昭和15			雷雨特別観測開始			
1941	昭和16	藤原咲平 (第5代)			北日本凶作		食糧その他の物資調達のため御殿場に事務所が開設
1942	昭和17		中央気象台は文部省より運輸通信省に移管	増山元三郎 気象病の研究	鳥取地震		
1943	昭和18						
1944	昭和19			風船爆弾の本格的利用開始	東南海沖地震		富士山頂に3300Vの送電を敷設 観測所は100V分電を受け昭和22年の高圧受電となった
1945	昭和20		中央気象台は運輸省の付属機関となる	阿部正直雲の研究により学士院鹿島萩磨記念賞を受ける	枕崎・阿久根台風 三河・渥美湾北部地震	牛山卯太郎 (在年数0・4) 中島 博 (在年数0・1) 藤村郁雄 (在年数22・6)	三島測候所および御殿場事務所の職員が主として当たることになった
1946	昭和21	和達清夫 (第6代)		全気象労働組合結成	南海地震		「富士山観測所」昭和25年4月「富士山測候所」と名称変更 「富士山頂の気象」第1号創刊
1947	昭和22			定点観測開始			
1948	昭和23			利根川洪水予報連絡会設立	アイオン台風・福井地震		
1949	昭和24		機構改革 5管区制となる	新聞に小型天気図掲載され始める	キティ台風		
1950	昭和25		気象協会創立				
1951	昭和26			各地で人工降雨実験			富士山観測所は測候所と改称
1952	昭和27		気象業務法公布	中央気象台職員組合再建	十勝沖地震		

西暦	年号	台長長官名	主として中央官署来歴	気象史項目	災害地	観測所長	気象史項目
1953	昭和28	和達清夫 (初代長官)	世界気象機関 (WMO) 加盟	レーダーの利用始まる民間天気会社 出来る	昭和28年～29年 東北凶作		多年気象学会でど尽力した佐藤順一勇退
1954	昭和29			東京で台風国際会議 気象事典(刊)	洞爺丸台風		
1955	昭和30			気象学講座刊行開始 藤田哲也メソ気象学の研究			野中至 没
1956	昭和31		中央気象台は気象庁 (運輸省所属)に昇格	原子爆実験の影響について内外に訴える (気象学会)			
1957	昭和32		府県庁所在の39の測候所 は地方気象台に昇格	国際地球観測年(昭和32年～33年)	諫早の大雨		
1958	昭和33	和達清夫 (初代長官)		無線模写放送開始	狩野川台風		
1959	昭和34			気象庁にIBM704電子計算機設置 気象学ハンドブック(刊)	伊勢湾台風		
1960	昭和35			数値予報国際シンポジウム(東京)	チリ地震津波		
1961	昭和36			国際固定通信線開通(東京～ニューデリー・ 東京～ニューデリー・東京ワシントン)	第2室戸台風		
1962	昭和37			気象庁研修所は気象大学校となる	昭和37年～39年 北海道冷害		
1963	昭和38	島山久尚 (第2代)	新庁舎完成 (千代田区大手町1-3-4)	観測原簿のマイクロフィルム化始まる	北陸豪雪 世界的異常気象		
1964	昭和39			静かな太陽観測年(昭和39年～40年)	新潟地震		
1965	昭和40			富士山レーダー完成 国際雲物理学会議(東京・札幌)	松代群発地震 (～昭和44年)		
1966	昭和41			阿部正直 没 凌風丸二世完成	北海道冷害		
1967	昭和42			国産電子計算機HITAC5020F/5020に 運用開始	42年7月豪雨 羽越豪雨		
1968	昭和43	吉武素二 (第4代)		小笠原気象観測所再開	十勝沖地震		
1969	昭和44			気象台観測船啓風丸進水 気象資料自動 編集中継装置(ADESS)運転開始			
1970	昭和45			WMO第2地区会議(東京)ロケット観測所完成			
1971	昭和46			大気汚染センター設置(東京等)	凍霜害		
1972	昭和47			日本気候図刊	北日本冷害		
1973	昭和48	毛利圭太郎 (第6代)		沖縄気象台発足	47年7月豪雨		
1974	昭和49			気象衛星課設置 気候変動調査会発足	全国的干ばつ		
1975	昭和50			長期予報管理官は課へ昇格	伊豆半島沖地震		
1976	昭和51			地域気象観測システム発足			
1977	昭和52			6月1日気象百周年			
1978	昭和53				伊豆大島近海地震 宮城県沖地震		気象レーダーの老朽化に伴い52年度機器製作 富士山レーダー更新 デジタル処理を採用し地形エコーを 除去するなど画期的なレーダーとなり気象テレメーターも 同時に更新(更新された機器は富士山資料館に寄贈され展示)
1979	昭和54						

富士山頂気象観測の歌

・作詞 藤村 郁雄

・作曲 菅原 芳生

1. 一万二千天雲の上

うき世の風のいつこ吹く
千古の雪に^{ミツギ}楔して
絶えざる^{ミトリ}観測にいそしむは
気象の二字に打込める
霊峰富士の観測者

2. 氷の^{イタダキ}頂風寒く

アイゼン固くいであれば
弥生の空に月残り
黄砂に^{コウサ}煙る十三州
栄華の港は遠く消え
いま^{タイトウ}駘蕩の春の夢

3. 雲縹渺^{ヒョウビョウ}の海となり

下界は雨に濡るるらむ
陽光ひとり燦として
氷の^{ツテナ}殿堂は雫する
噴火口壁に声ありて
夏の兆を告ぐるなり

4. 暗雲低く掠めつつ

矢羽根は南に転じたり
気圧の降下加速する
時こそ来れ台風ぞ
雨も降れ降れ石も飛べ
吾等が力を試しみむ

5. 秋玲瓏の朝ぼらけ

紫紺の山脈空を載り
炊^{カン}ぎの煙は地に^{ナヒ}靡く
御稜威^{ミ イ ツ アマネ}冷き天が下
遮る雲も影ひそめ
太平洋上波もなし

6. 電池は凍り眉凍る

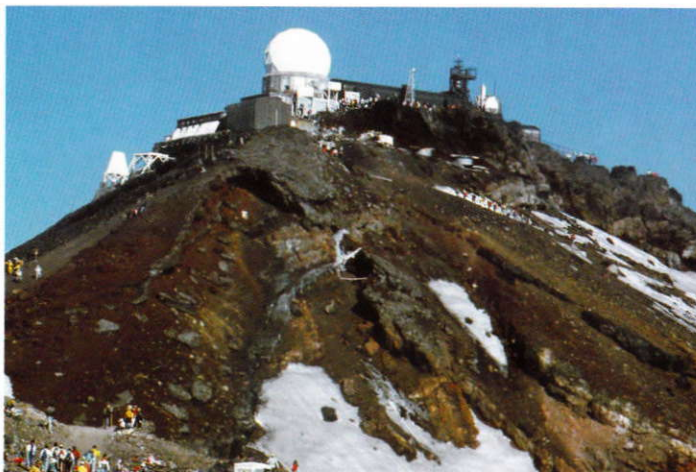
エンジン重く息弾む
通信任務重ければ
夜を徹しても始動せむ
互に励まし手入せば
注ぐ重油も凍りたり

7. 樹氷の華よ天地よ

この壮麗の頂よ
危難を越えて^{ミトリ}観測せし
艱苦はここに^{カンク}酬いられ
ああ雲表の別天地
自然は秘庫を啓せり

8. 命を賭けし^{ミトリ}観測こそ

吾が^{ヨロコ}欣びの使命なり
永久に伝ふる記録こそ
吾が^{ミツギ}欣びの貢献なり
いでや科学の矛とりて
御国の光をいや増さむ
いでや科学の盾とらむ
護れ浅間この使命



Ⅱ．富士山測候所の果たした気象観測

日本の最高峰富士山での気象観測がなぜ必要であったのか。野中至はなぜ越冬観測を行おうと考えたのか。日本の気象観測史の中で、富士山測候所が果たした活動と役割りを紹介するとともに、なぜ、富士山測候所建設に当たって御殿場口が選ばれたのかを紹介します。

1. 富士山測候所建設の歴史

明治28(1895)年10月から12月にかけて野中至夫妻が生命をかけて富士山頂における冬期気象観測に挑戦した。明治34(1901)年、茨城県の筑波山頂に高山観測所が建設され、この初代所長に就任した佐藤順一は、富士山頂にも観測所を建設することを志し、明治40(1907)年1月に筒井技手をつれ、強力(たけちか)の鶴吉らとともに富士山に登山した。そのとき、野中至夫妻は、御殿場市当時の玉穂村中畑の別荘の庭に望遠鏡を据え、冬の富士登山に挑戦する佐藤技師、筒井技手と3人の強力に声援を送ったと伝えられている。

昭和2(1927)年8月、東京自動車学校の鈴木靖二校長の出資によって、富士山頂の東安河原に気象観測所が設置され、この建物が「佐藤小屋」と呼ばれた。昭和5(1930)年1月初旬から佐藤順一は強力(たけちか)の梶房吉の援助をえて山頂観測を行ったが、食糧が欠乏し健康を害した。強力(たけちか)の長田輝雄、稲葉英一による野菜や肉の差し入れによって予定通りの観測を終え、2月7日に迎えに出た長田輝雄によって無事に下山することができた。

このような、野中至夫妻による富士山頂による冬期観測の必要性を訴える行動や、野中至の行動と意志を継ごうとする佐藤順一技師を中心とした勇志の行動によって日本の気象観測に富士山頂からの情報が必要であるとの判断がしだいに築かれていったと思われる。

昭和7(1932)年には、50年に一度世界各国が極地や高層での気象を協同観測する極年観測の年であった。日本ではその事業の一つとして、富士山頂に国の費用によって中央气象台富士山頂気象観測所が建設され、7月1日から气象台職員によるさまざまな努力と熱意によって通年観測がはじまった。

(1) 富士山測候所と御殿場

① 御殿場口登山道の開さく

幕末の開国後外国人の中にも富士登山を試みるものが現れ、英公使オールコックは、富士宮の村山口から富士山に登った。また、明治に入ると女性の富士登山も許可されたので、女性、子供や外国人でも気楽に登れる登山道が必要となった。これまで、新しい登山道の開さくを許さなかった御師が明治初年に廃止されたことも新しい登山道の開さくのために好都合となった。

このような状況の中で、御殿場口登山道の開さくがはじまった。

御殿場口登山道の開さくの中心となったのが伴野佐吉である。伴野佐吉は、御殿場清後村の勝又庄右衛門の長男として生まれ、明治5(1872)年に、御殿場村の旅館主伴野伴治の長女と結婚し、伴治の養子となった。

その翌年、佐吉は御殿場村、中畑村などの有志たちと相談し、江戸時代から地元の人々が利用してきた御殿場村から中畑村字西沢木境をへて、宝永山北方の富士山4合目にいたる間道を、いばらを刈るなど整備して登山者が通れるようにした。そして、佐吉は30数名の同志と共に静岡県参事に御殿場口登山道の開発を願い出たが、他の登山道の反対にあい却下されてしまった。

明治8(1875)年9月、中畑村副戸長勝又元八は総代である福嶋源太郎、土屋三郎兵とともに御殿場村「富士山新道切開規定証」を提出した。また、翌年3月には登山の道筋にあたる御殿場村、北久原村、



仁杉村、中畑村は連名で、「須山口4合目から中畑村を通して御殿場村に至る古道を有志によって修繕したので、参詣人が安心してこの道を使用することができるようになった」という趣旨の富士山近道修繕届けを提出している。

明治14(1881)年3月26日、発起人伴野佐吉、高橋林兵衛、杉山久平、高田和角、西田中村齊藤庄七、東田中村鎌野所左衛門、中畑村勝又元八、御殿場村服部平兵衛、杉山新蔵、渡辺彦助らは静岡県令大迫貞清に「富岳使道開通願い」を連名で提出、道銭をとらないことを条件に明治15年6月15日に許可された。

明治16年に開さくされた富士登山東表口は、御殿場村—北久原村—仁杉村—中畑村というコースであったが、明治22(1889)年に東海道線が開通すると御殿場駅が基点となり、御殿場駅—湯沢—ぐみ沢—中畑のコースにかわった。明治42(1909)年に陸軍の滝ヶ原廠舎が設置されて軍用道路が開通すると、現在の登山道が確定した。

② 御殿場市(御厨町)の発展

明治22(1889)年7月1日、東京(新橋)と神戸間を結ぶ東海道線が開通した。御殿場駅を通る上下線は、開通時の2倍に当たる上下各4本となった。

明治22年8月に測量が開始された複線化工事は、翌23(1890)年1月に着工、同年12月には沼津・御殿場間が、翌24年3月には御殿場・小山間が完成した。

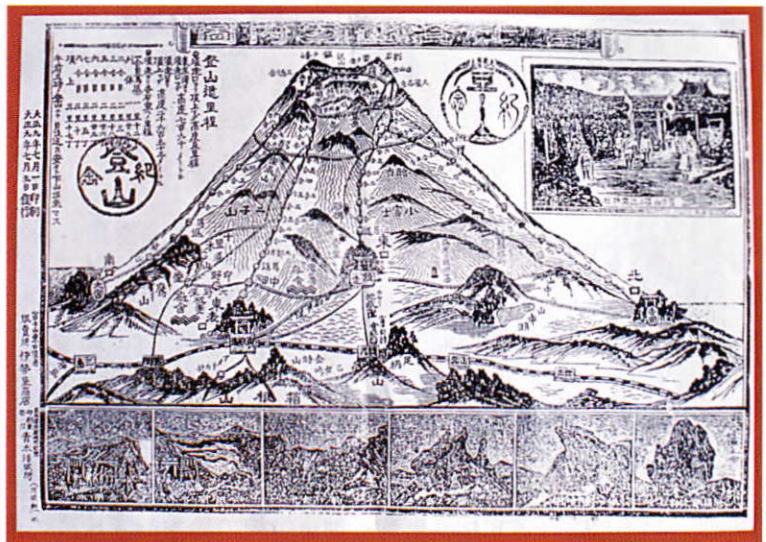
ア. 御殿場駅の役割

富士登山客の乗降

明治16(1883)年夏、伴野佐吉をはじめ御殿場の旅館や商店主らの尽力により、富士登山道の新道が開設され、「富士山東表口登山道」とした。東京や大阪方面からの登山者を多く集めることになった。

御殿場駅前通りの旅館や商店の発展はめざましかった。登山客を相手としたさまざまな営業が盛んに行われ、強力・カゴかき・道案内・馬方・休息小屋などが繁盛した。

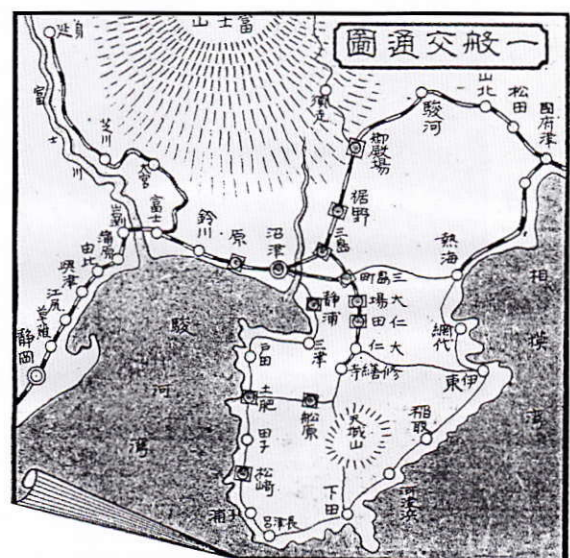
明治25(1892)年5月、富士山東表口組合として「富士登山に関する営業人規約書」が作成されている。



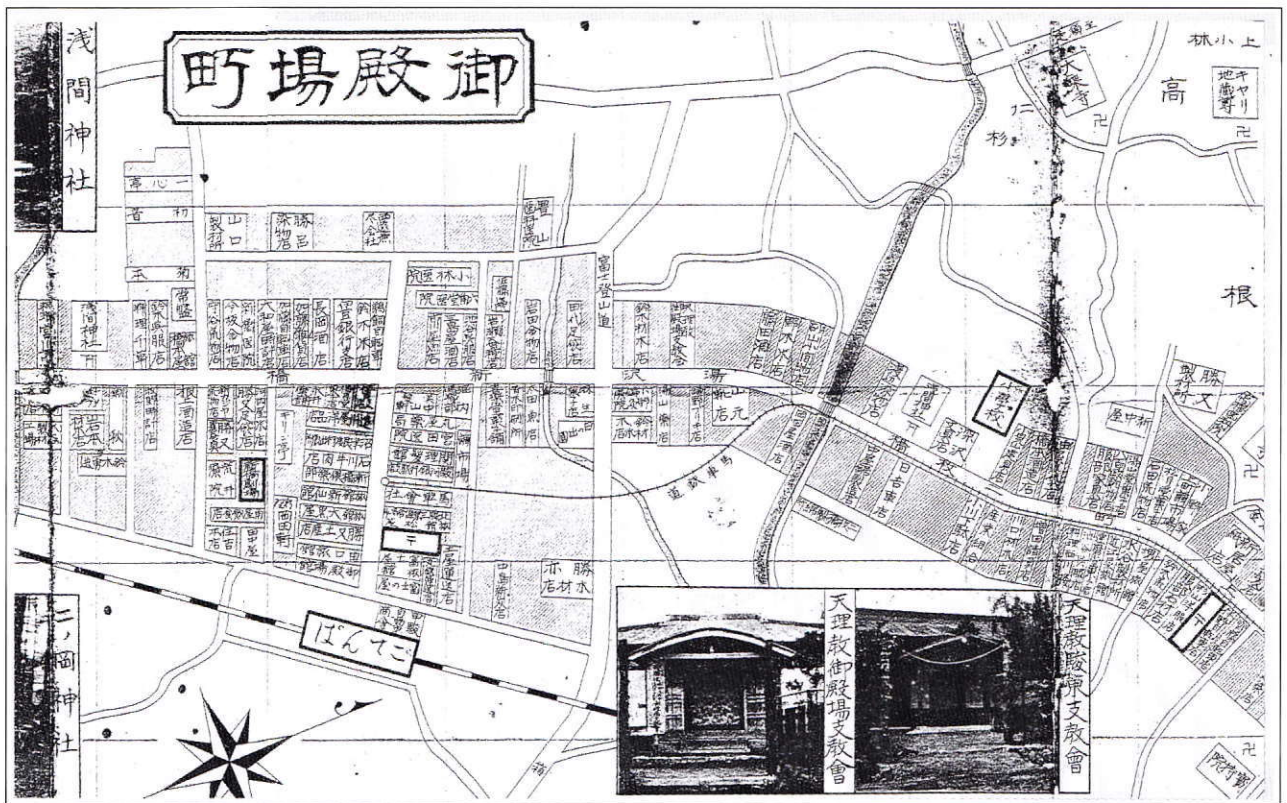
御殿場口登山道



登山道開通記念碑



昭和2年頃の東海道線



昭和2年頃の御殿場駅前商店街（「大日本職業別明細図之内」より）

富士登山は、東京から汽車に乗っておよそ4時間、健脚な人なら日帰り登山も可能となったことから、東海道線の開通したところから御殿場の観光業の主役へとなっていった。

こうしたことから、御殿場駅が御殿場地方の交通の要となり、さらに甲州地方への連絡中継駅や富士登山者の乗降駅となったことは、御殿場駅を基点としたあらたな鉄道や「馬車鉄道」などの計画を立てるきっかけとなった。

御殿場商業地の形成

明治22(1889)年の御殿場駅開業から日ならずして、駅から街道へ出る駅前通りには、旅館・飲食店・運送業・強力事務所などが立ち並んだ。

駅にもっとも近い通りの西側には、御殿場館・富士野屋・大黒屋・田口旅館・松屋などの旅館が立ち並んだ。旧御殿場で旅館「富士屋」を経営していた伴野佐吉も駅前に進出してきた。

③ 御殿場馬車鉄道の建設

明治29(1896)年8月、東海道線御殿場駅から須走へ至る馬車鉄道の建設計画を内務省に申請した。発起人は、御厨町二枚橋の勝又勝美と須走村の梶禎を代表としたメンバーであった。

御殿場駅を基点に、足柄街道沿いに旧御殿場を通り、北久原・仁杉・水土野をへて須走へ、御殿場駅から富士山麓をまわって山梨県郡内を結ぶ計画だった。用途は貨物と乗客両用で、郡内地方との貨物の往来や富士登山客などの利用者を当て込んだ。

明治31(1898)年3月6日	御殿場馬車鉄道株式会社の設立総会
3月	馬車軌道の建設工事開始
11月11日	新橋—御殿場間開業
12月5日	柴怒田まで延長
明治32(1899)年1月23日	須走まで全線開通し、開業式を行う
明治34(1901)年12月	新橋—駕籠坂間が全通

馬車鉄道の衰退

明治36(1903)年6月、中央線の開通は御殿場馬車鉄道に大きな打撃を与えた。

東京―大月駅まで中央線、大月から富士馬車鉄道、都留馬車鉄道を利用した富士吉田口からの富士登山が時間もかからず費用も安くなっていた。このため、御殿場駅を利用した富士登山客の減少が見られるようになった。

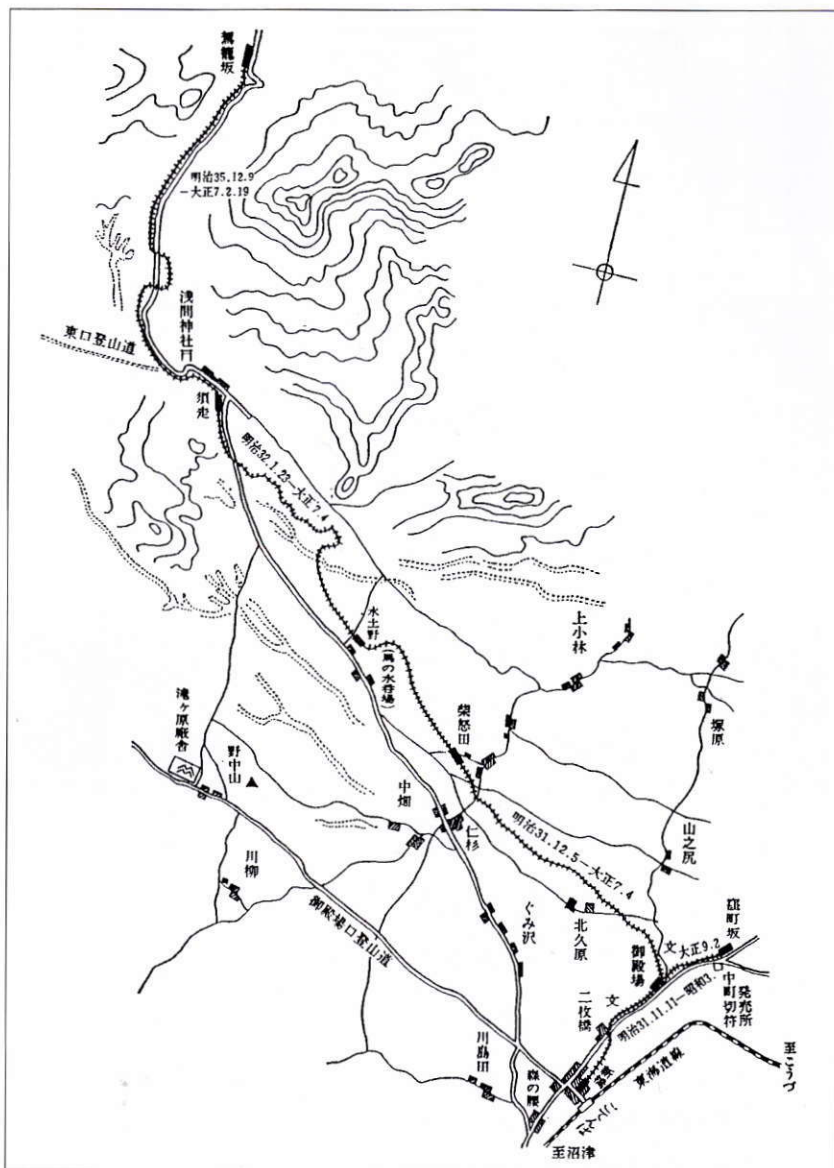
その結果、明治38(1905)年9月御殿場馬車鉄道は解散し、野中至が当時の1万円で買収した。野中至は玉穂村中畑に居住し、富士山頂冬季観測所設置運動を進めていた。

明治38年9月、御殿場馬車鉄道はそのまま野中御殿場馬車鉄道として継承された。

しかし、その後も御殿場馬車鉄道の利用は減少し、明治42(1909)年4月、野中の経営から勝亦国臣、杉山隆義ら御殿場の地主商人たちによって再発足した御殿場馬車テッ

ドウ株式会社へ移った。御殿場馬車鉄道の利用拡大と経営について地元の人々の手によってさまざまな努力がなされたが、大正6(1917)年9月、新橋―西田中コウノ巢間に短縮され大正9(1920)年春、御殿場上町から御殿場中町間に延長、上町―西田中コウノ巢間の登録へと変更された。

昭和3年頃、新橋―御殿場中町間になった最後の馬車鉄道も全線撤廃された。



御殿場馬車鉄道の経路(御殿場市史より)

④ 御殿場の観光

スキー発祥の地

日本で初めてスキーを披露したのは、明治42(1909)年、オーストリアのレッツェルホーラー商社の駐在員として来日したクラッツェルであった。横浜に住み、同年12月に御殿場の富士山太郎坊を訪れてスキーを楽しんだ。このような意味では、御殿場はわが国のスキー発祥の地といえる。

案内役は、東京朝日新聞の御殿場通信局主任の永井福太郎でした。永井は、勝俣国臣と相談し、スキー10台を購入して無料貸与を行い、大正2年には地元の有志約50人にてスキー倶楽部を組織した。

富士登山自動車の開業

大正9(1920)年、御殿場口営業組合事務所発行の「御殿場口登山の栞」には、「御殿場から太郎坊までは、自動車・馬・かご・乗合換用馬車の便がある。太郎坊から8合目まで馬やかごで登山、8合目から上は徒歩で登る。」と紹介している。

- ・御殿場から太郎坊までの運賃＝乗馬 2 円30銭 かご 5 円20銭 乗合換用馬車 1 円30銭
- ・宿泊料＝駅前旅館 1 等 3 円以上 2 等 2 円50銭 3 等 2 円
- ・富士山内休泊所 2 円
- ・強力賃金 4 円（富士山頂往復）
- ・飲食物＝甘酒10銭 赤飯10銭（1 椀） うどん35銭（1 丼） ビール85銭 サイダー45銭
- ・御殿場から太郎坊までの乗合自動車のはじめて運転されたのは大正 3 年の夏、ドイツ式 8 人乗り自動車 3 台が使用された。

〈大正 6 年の富士山東表口営業組合の報告書〉

- ・強力112人 馬方104人 換用馬車15台 普通馬車 4 台
- ・強力＝新橋31人 萩原20人 仁杉13人
- ・馬方＝新橋65人 東田中20人
- ・この年の登山者は37,000人、下山者は52,000人

大正11年 1 月、沼津御用邸滞在中の皇太子裕仁（当時）は、滝ヶ原廠舎を訪れ、五本松、馬返し方面でスキーを楽しまれた。

御殿場駅前の繁華街

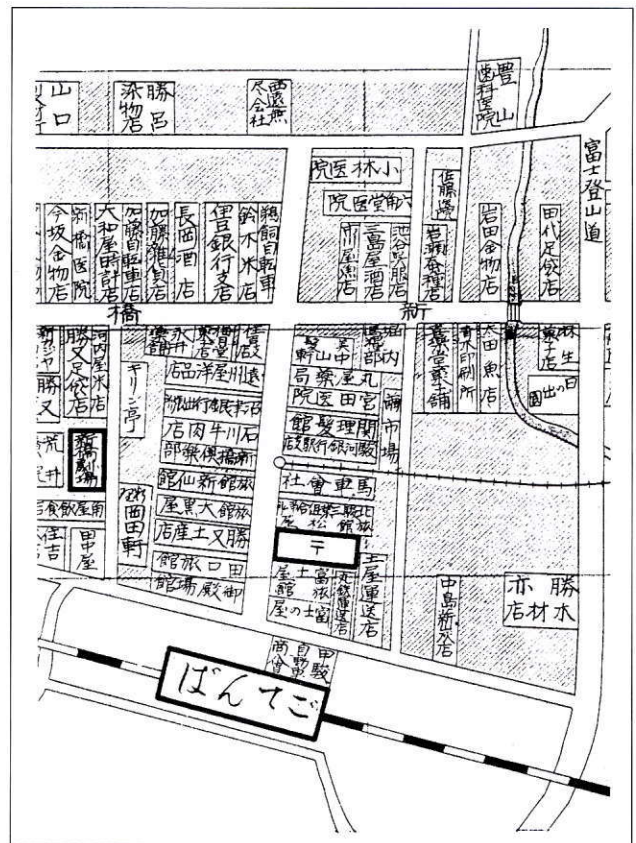
御殿場駅前を中心に、富士山御殿場口登山道が開設され、馬車鉄道が敷かれると、駅前に旅館や商店が立ち並び、多くの旅行客を迎えている。

昭和 2（1927）年当時の様子を示す絵地図を見ると、駅前には御殿場館・田口旅館・大黒屋・新仙館・富士の屋・富士屋旅館・松屋などの旅館の名が見られる。また、馬車鉄道の出発地には「馬車会社」の名も見られる。

岳麓デパート

昭和 6（1931）年 7 月 6 日に御殿場馬車鉄道の発着駅の跡地に岳麓デパートが開業した。デパートの開業には、町の有志たちが祝儀を出し、岳麓デパートの誕生を祝った。

建物は平屋であったが、当時としてはモルタル塗りのモダンな建物であった。店内には、駄菓子屋・食堂・木地屋・化粧品・果物・茶わん屋が店を出しにぎわいを見せていた。しかし、7 年後の昭和13(1938)年に店を閉じた。



御殿場駅前の旅館街



松屋旅館のはっぴ



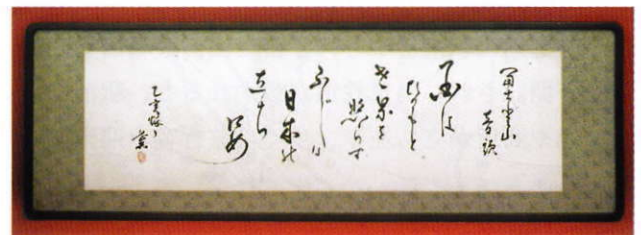
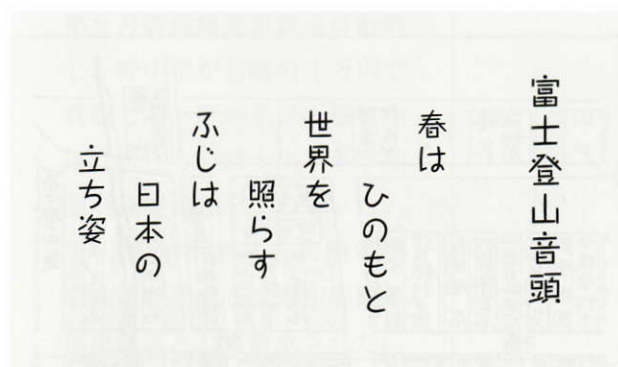
岳麓デパートのはっぴ



御殿場の繁栄

御殿場口登山道が伴野佐吉を中心に明治15年6月に開さくの許可を受け、須山口登山道の4合目につなげる形で開通し、明治22(1889)年に東海道本線が開通。これに合せて御殿場駅が設置され、登山道も御殿場駅を起点とするコースに変わっている。さらに駅前商業地の発展、富士山御殿場口登山道を中心とした観光事業や御殿場馬車鉄道の建設へと発展していった。その発展の勢いは、御殿場を中心に周辺の地域を巻き込んだ「富士登山音頭」や「スキー音頭」の作成や普及の姿に見ることができる。

明治13(1880)年8月、東京大学教授メンデンホーンが富士山頂における重力測定を行い、明治20(1887)年9月、クニッピングは正戸豹之助と共に富士山頂での気象観測を行う。さらに、明治28(1895)年10月1日から野中至夫妻による富士山頂での冬季観測へと山頂での気象観測が進められていくわけであるが、山頂での気象観測の実施と、御殿場口登山道の開さくや東海道本線の開通、御殿場駅の設置、御殿場の繁栄が上手にかみあい、富士山頂における気象観測と、そこに勤務する所員を支える御殿場の人々とのつながりが強まっていったのではないかと考えらる。



⑤ 富士山頂気象観測と御殿場

富士山頂という極地での気象観測の開始は、明治13年8月、東京大学教授メンデンホーンが富士山頂において重力測定を行ったのが始めである。以来、富士山における気象観測は夏季を中心にさまざまな形で実施されていくが、気象観測をおこなった観測者のほかに、その山頂での観測を支援した地元協力者がいた。

明治28年に富士山頂での気象観測の必要性を訴え、自ら行動を起こした野中至夫妻の冬季観測を陰で支えた御殿場中畑の佐藤家、強力や馬方、野中小屋建設にたずさわった方、観測状況を麓から見守った方など多くの協力者がいたと思われる。また、昭和2年佐藤順一による富士山頂観測に伴い建設された佐藤小屋の建設にたずさわった須走の棟梁大森家。佐藤は、以来この佐藤小屋にて夏季または冬季の気象観測を継続していった。



佐藤小屋と東安河原に建てられた観測所



雪と氷におおわれた東安河原観測所

昭和7年には、同年8月1日から開始される極年観測実施のため計画された富士山頂東安河原への新庁舎の建設が始まっている。

現地調査により三浦喜一の構想のもと、吉田満成が設計した新庁舎は、昭和7(1932)年7月5日、中央气象台長代理三浦喜一、請負人福嶋一造、棟梁外山竹二郎(御殿場)が参列して地鎮祭を行い、6日着工その秋に完成しました。実質的な工事監督は関口鯉吉が当たっている。

昭和10(1935)年には、富士山頂東安河原にあった富士山頂観測所を剣ヶ峰に移す計画が実施されました。剣ヶ峰庁舎の建設は文部省建築課池松治四郎監督のもと、東安河原と同じく外山大工が請け負い、昭和10年5月に整地作業を開始、11月20日までに外装をほとんど完成させている。

山頂観測所が完成し、観測が始められると、観測所員の生活を守るためさまざまな物資が山頂に上げられた。その物資の荷揚げを担当したのが、「強力」・「馬方」である。荷揚げ物資の内、米や炭など貯蔵のきくものは、夏のうちに7合8勺まで馬で運び、そこから上は強力の手によって山頂に運ばれた。また、冬季には御殿場太郎坊からすべて強力によって荷揚げされた。特に野菜などの生鮮食料品や機器の修理備品は観測所員の交代時とその中間期に強力によって荷揚げされ、測候所員の健康と観測の継続には、欠くことのできない存在といえる。

この当時強力として協力した人たちは、梶房吉、内田忠代、小見山正、勝又文一、山崎佐太郎、梶正作、青木利雄、勝亦進、田代東作、志村弘らの名があげられる。

馬方として協力した人たちは、勝又久雄、勝又米吉、勝間田和一、芹澤進一らがあげられる。

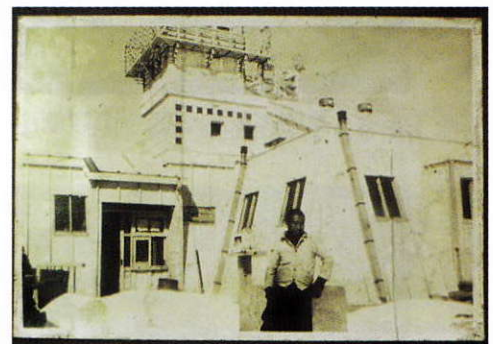
富士山頂という環境の中で始められた気象観測は、観測所員を中心に強力や馬方など多くの人々が関わるなかで始められたのである。



東安河原での地鎮祭



雪と氷におおわれた観測所



東安河原に建つ観測所
新庁舎(事務室)と測風塔



東安河原に建つ観測所
短波空中線が見える



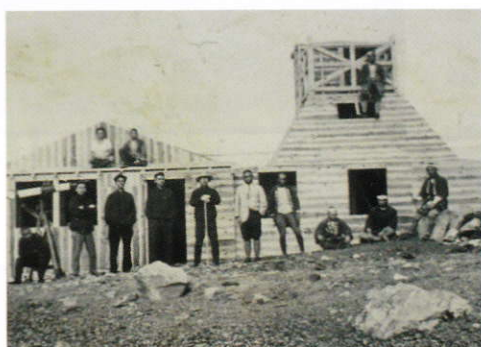
東安河原に建つ新庁舎と短波空中線

富士山頂観測所の建設に携わった御殿場の大工外山竹二郎たち



東安河原観測所の前に建つ外山大工たち

前列右側が棟梁の外山竹二郎▶



東安河原に建設中の観測所



御殿場で行われた観測所の仮設



剣ヶ峰での観測所の建設



◀ 剣ヶ峰に建設中の
観測所にて



剣ヶ峰に立つ風速塔



剣ヶ峰観測所に建築中の測風塔



外山竹二郎と家族



大工外山のハッピーと
ピッケル



ハッピーには「寅」の
背文字がはえる

山頂における気象観測の代表的な出来事

- 明治13(1880)年8月、東京大学教授メンデンホーンが富士山頂において重力測定を行う。
- 明治20(1887)年9月、クニッピングは正戸豹之助と共に富士山頂で気象観測を行う。
- 明治22(1889)年、このころより8、9月の夏期における高山観測が始まり、富士山は中村精男が(8月1日から9月7日)行い、近藤九次郎が、山中湖畔で山麓観測を行う。
- 明治28(1895)年10月1日から野中至夫妻富士山頂(東安河原)で観測、12月下山。この年以降、明治43年まで夏季1ヶ月以上にわたって富士山頂気象観測を実施。
- 明治40(1907)年1月、佐藤順一ら雪中富士登山、日本の高山観測について論文発表。
- 大正12(1923)年7月30日、摂政宮、富士御登山。國富信一、山頂で天気予報を行う。
- 大正14(1925)年8月28日、佐藤順一、富士山に佐藤小屋の敷地決定。
- 昭和2(1927)年8月、佐藤順一、富士山頂(東安河原)にて観測開始。
- 昭和7(1932)年8月1日、富士山頂で極年観測始まる。
- 昭和9(1934)年12月、日本学術振興会において、気象観測についての原案を岡田武松・安藤廣太郎に付設。富士山頂観測所は三井報恩会の7,000円で更生継続。
- 昭和10(1935)年6月、政府事業として山頂観測所を維持することが認められる。
- 昭和11(1936)年8月、富士山頂観測所は剣ヶ峰に移る。
- 昭和17(1942)年、太郎坊に交代者の宿泊及び荷扱所として太郎坊避難所を設置。
- 昭和20(1945)年3月1日、御殿場臨時出張所創設。
- 昭和22(1947)年、下土狩分室を設置。
- 昭和23(1948)年4月富士山頂観測所は、三島測候所から分離独立。
- 昭和24(1949)年6月、富士山頂観測所は、富士山観測所に改称。
- 昭和25(1950)年6月1日、富士山測候所に昇格。
- 昭和35(1960)年、長田記念事業実行委員会の寄付により、長田尾根の安全柵建設が始まる。
- 昭和39(1964)年10月1日、富士山レーダー完成。



2. 富士山測候所の勤務と観測器機

富士山測候所有人観測72年の間に測候所員をはじめ、彼らを支えた強力や馬方などさまざまな歴史が刻まれ、その勤務の中で使われた生活の道具や観測器機にもいろいろな工夫や改良が加えられている。測候所で暮らす所員の衣食住に使われた生活用具や登山用具、気象観測器機にも時代の移り変わりの中で改良され、所員自らの身の安全と正確な気象情報の提供のために重要な役割を演じた。



防寒服(昭和20年代)



防寒帽



防寒服



防寒用長靴



ピッケル



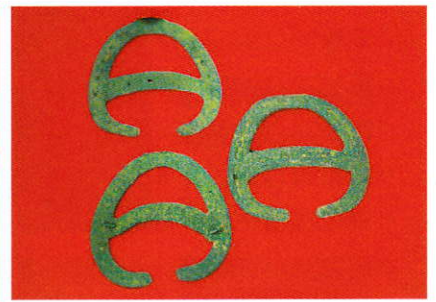
背負子▶



登山靴



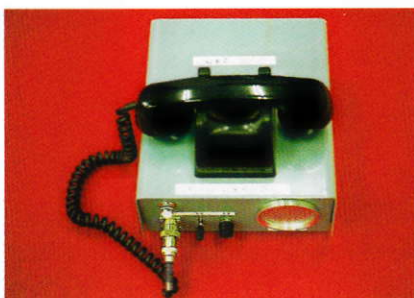
アイゼン



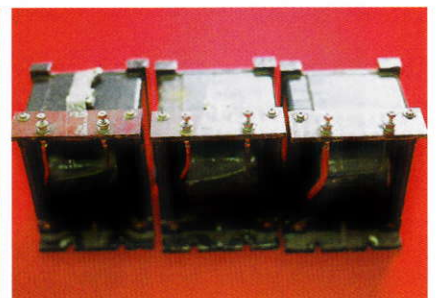
馬方用馬の金ぐつ



圧力釜(山頂測候所用)



無線電話機(東京局向け)



交流低電圧トランス
(山頂測候所用)



酸素吸入器

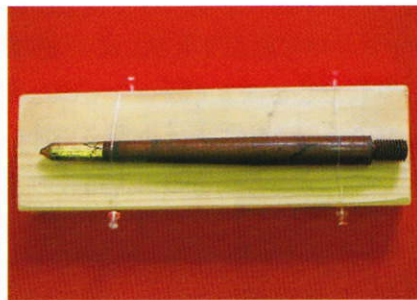


木づち（観測器霧氷落とし用）

◀送電ケーブル（見本）



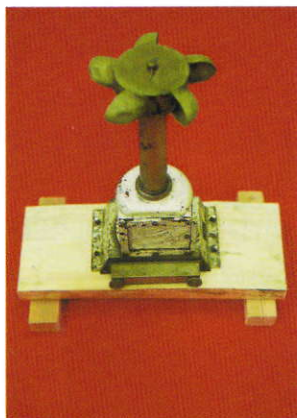
送電ケーブルサンプル



雷よけ送電線アース端子



ロビンソン風力計



藤村式風力計



風車型自記風向風速計



地中曲管温度計



寒 暖 計



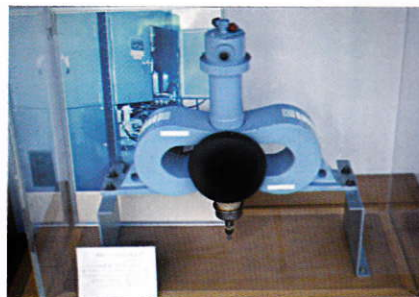
山岳用気圧計



ジョルダン日照計



藤村式雨量計



マグネトロン

昭和39年に完成した初代富士山レーダー

本州を直撃する台風を捕え、さらに低気圧や前線に伴う雨も広範囲にわたって探知できる富士山レーダーが昭和38・39(1963・1964)年にかけて建設された。この建設はレーダーが三菱電機、建物は大成建設が主導的な役割を担って実行されたことはよく知られていたことである。しかし、その技術者の下で実際の働き手となった多くの地元の人々を知る人は少ない。富士山レーダーとレーダードームを建設するために山頂の現場へ登った人々の中に御殿場市の田代建設の人々が上げられる。田代建設に当時勤務し、現在裾野市十里木在住の横山英三郎氏(79歳)がいる。当時横山氏は建設作業員の体調や食料・水の確保、そして山頂まで調達した食料を運搬する責務を負っていた。山頂への食料の中で、作業員にもっとも喜ばれた野菜は「きゅうり」だった。きゅうりはその体内に水分と空気の両方を含んでいるため、水と酸素不足という山頂には絶好の食料となったのである。山頂までは御殿場口登山道を利用し、太郎坊から運搬組合の伊倉範夫氏によるブルドーザーによって物資を荷上げしていただいた。山頂では田代建設の仲間たちが標高3776mという極めて厳しい環境と、空気が薄くエネルギーの消耗度が激しい労働条件の中で石積み作業を行っていた。石積みは現地の溶岩を使うが、体力の消耗が激しいため、一人が石を探しその石を別の作業員の肩へ載せる。石を背負った作業員は建設現場まで運ぶという手順で石垣を組んでいった。

富士山レーダー建設という大事業においても、やはり地元の多くの手が加わる中でレーダー完成という偉業を達成できたのである。



太郎坊にて 中央右が横山英三郎氏



御殿場口登山道を登る



山頂 馬ノ背



山頂へ建設中のドームが見える

Ⅲ. 富士山測候所を支えた人々

70余年におよぶ有人観測が行われた期間、富士山測候所に勤務し、また側面から支援された方々の数は700名を下らないと言われる。それぞれの方がそれぞれに富士の厳しい環境と対峙して勤務に打ち込み、さまざまな思いと体験をお持ちのことと思う。

本来ならばそのすべての方々の御労苦に報いるため、全員にスポットをあてるべきだろうが、それは物理的に不可能なことである。今回の特別展では、主として現在地元にお住まいの方々に取材対象をしばった。

登場して頂く方々の声やその方々に関わる資料を通して日本の天気予報に多大な貢献をした富士山測候所と文字通り命を賭してそれぞれの業務を遂行した関係者すべての苦闘のさまを少しでも推し量っていただけたら幸いである。

1. 殉職された方々

72年におよぶ山頂測候所の歴史の中で、富士の苛酷な自然は4名の有能な勤務員の命を飲み込んでいる。「支えた人」を紹介するに先だって、日本の気象観測発展のための尊い犠牲になられたこの方々の功績に敬意と感謝の意を表して、以下にお名前を記す。

今村一郎氏 無線通信員として、昭和19年4月11日、交代登山の際、吹雪のため道を失い獅子岩上方にて殉職。初めての登山だった。享年19歳。

小出六郎氏 観測員として勤務中の昭和21年1月28日、九合目付近の蒼氷上を滑落。享年28歳。高潔な士だった。

長田輝雄氏 昭和33年2月26日。交代登山の際突風にあおられ七合目石垣から転落。享年58歳。こつこつとルート改善に努め、「長田尾根」を残す。

福田和彦氏 宇都宮出身。昭和55年4月12日、山頂で気象観測中、噴火口へ滑落して殉職。享年26歳。山頂勤務7年、新しい時代を担う好青年だった。

この方々の御霊を弔い、その名を刻して永く記念するための殉職碑が創立50周年記念行事の際、全国気象官職員の寄付により御殿場口大石茶屋付近に建立された。この殉職碑は付近の度重なる雪崩の襲来で安全でなくなり、現在は太郎坊横に移転されている。



殉 難 碑

2. 野中 至

～富士山頂冬季観測に挑む～

慶応3(1867)年、筑前黒田藩に生まれる。医学を志し上京し、大学予備門に学んだが中退し、富士山頂越冬気象観測を計画した。

明治28(1895)年、私財をもって剣ヶ峰に観測所を建てる。10月1日から一日、12回の観測を開始した。その後、千代子夫人も登頂し、夫を助け共に観測を行った。奮闘したが、野菜不足などにより兩人とも体調を崩し、下山を余儀なくされる。

この野中夫妻の挑戦により、食糧等さえ整えば山頂越冬観測の可能であることが実証された。

この野中夫妻の挑戦のさまは直木賞作家新田次郎の「芙蓉の人」や千代子の「芙蓉日記」に詳しい。以下に抜粋する。



野中 至夫妻

(1) 「芙蓉の人」より

～野中至の決意～

「天気予報が当たらないのは高層気象観測所がないからなのだ。天気は高い空から変わってくるだろう。その高い空の気象がわからないで天気予報が出せるわけがない。富士山頂は3776mである。その頂に気象観測所を設置して、そこで一年中、気象観測をつづければ天気予報は必ず当たるようになる。だが、国として、いきなり、そんな危険なところへ観測所を建てることはできない。まず、民間の誰かが、厳冬の富士山頂で気象観測をして、その可能性を実証しないかぎり、実現は不可能である」

千代子は夫が日ごろ口にしてその言葉を暗記していた。

(2) 「芙蓉日記」より

～山頂から退く～

明けくれば23日、和田大人は己達2人にとておさおさ持ち越し給える牛乳を給わりければ、真に魂の緒の心地していただきぬ。一同打ちたたんとするに人々の御心入れにて良人も己も胸苦しうありなんとて背負子を椅子のかたに組合わせ、そが上にのせられて山下に向ふ。その道すがら和田、筑紫、平岡の方々何時も己等2人につき添い給ひ、何くれと懇に御心を尽されぬ。やがて三合目につきにければ、此所には早や麓なる有志の方々焚き出し等調し待受け給ひ、また深良村なる医師瓜生大人来り給ひたれば、とり敢へず己等2人の容態を診察してお薬など賜りぬ……。

(3) 「芙蓉の人」より

～その後の野中夫妻～

健康を取戻した野中夫妻は御殿場の中畑の佐藤興平次の家近くの丘の上（注：現在野中山と呼ばれている）に居を構えて、富士観象会を作った。

和田雄治がこれに協力し、野中夫妻の壮挙に感銘を受けた多くの人達が応援した。至は民間人の力によって富士山頂の東安の河原に新しい観測所を建て、出来上ったところで、これを国に寄付して国営の観測所にしようと考えたのである。

しかし、この計画も和田雄治が、朝鮮総督府気象台長として日本を去ってからは、必ずしも順調に進んではいかなかった。

野中至の徒手空拳をもってしてはなにもすることはできず時は流れて行った。この間、千代子は三男二女をを生んだ。生活は苦しかったが千代子はよく耐えた。一度、男として、志を立てた以上、他の仕事には一切手を触れようとしない夫に尽くした。

富士山頂東安の河原に、ようやく第二の野中観測所が設立されたのは大正の初めの頃であった。



野中山遠望

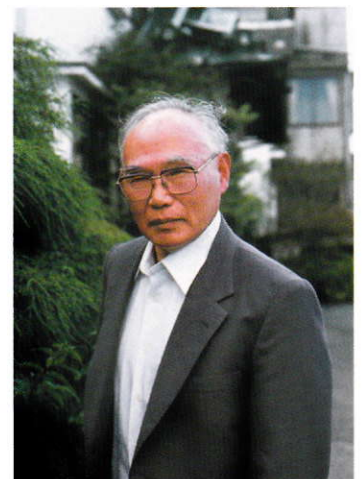
3. 佐藤 昭氏

～野中至と深く関わる～

御殿場市中畑在住。郷土史家、作詞家。

仕立業を営むかたわら、郷土の発展に尽くした人々の業績に目を向け、その調査・研究を行う。

また、詩作に秀で、初めて山頂冬季観測に挑んだ野中至をたたえ、歌曲「芙蓉の人」を作詞した。野中夫妻が山頂をめざした時、地元でとことんまで支援した佐藤興平次は昭氏の曾祖父である。



佐藤 昭氏

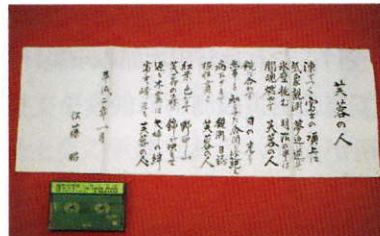
(1) 歌曲「芙蓉の人」

佐藤 昭作詞
鈴木慎一作曲

一、凍てつく富士の頂上に
気象観測 夢追い遂げて
氷壁挑む 明治の半ば
闘魂燃やす 芙蓉の人

二、鏡に合わす 日の光
無事を知らせた 合図も途絶え
病おさえて 観測日誌
根性貫く 芙蓉の人

三、紅葉色なす 野中山
芙蓉の森に 錦が映えて
返る木霊は 夫婦の絆
富士ヶ嶺光る 芙蓉の人



佐藤氏自筆「芙蓉の人」



至も見た野中山の杉

(2) 曾祖父與平次の茶屋

(新田次郎「芙蓉の人」より)

野中至が富士山頂に観測所を設立するに際して基地の建設事務所となった佐藤與平次の家は野中千代子の日記によると、駿河国駿東郡玉穂村中畑滝ヶ原にあったと書かれている。與平次の家は富士山に向って登山路の左側にあり、此処より先には人家は全くなく、外へ出ると富士の高嶺は額より爪先まで一目で見渡される。(中略) 佐藤與平次とけさの夫婦は既に60を越していた。家督を息子に譲って、末娘のつると三人で旅籠を経営していた。登山期には登山者や富士溝の行者が泊ることがあったが、それもせいぜい二ヶ月の間で、時期が過ぎると、泊り客はなくなり、猟師や樵夫や薬草取りなどが落合ったり、休憩するためのたまり場所になっていた。この地方の人たちは佐藤茶屋とか與平次の茶屋と呼んでいた。

(3) 與平次と千代子

御殿場の駅には至のかわりに與平次が迎えに来ていた。

野中先生の奥さまですか、與平次でございます。先生が仕事が忙しくてお迎えに来られませんので私が参りましたと、かぶっていた手拭を取って挨拶する與平次の顔を見ながら、千代子はその老爺が、至が言ったように、まことに正直な人間であることに間違いのないと思った。

滝ヶ原に着くと、與平次は千代子を離れの隠居所に案内した。野中夫妻のためにそこをあけておいてくれたのである。

裏庭は大工たちのための仕事場になっていて鋸や鉋を使う音がしていた。野中観測所の建築用材の切り組みの仕事は順調に進んでいるようであった。

(中略) 「奥さま、こんなことを爺が言うべきことではないかもしれませんが、奥さまはなにか隠していなさるね」御殿場の商店で副食物の調達が終わった後の帰り道で、與平次は馬の鼻面を肩でこらえるようにして踏み止まって言った。千代子はしばらく考えていたが、ぼんと身軽に馬の鞍からとびおりると、小さい気合いのこもった声で言った。「おじさん、私は主人のあとを追って富士山に登るつもりです。でもこのことは今主人に言っては困ります。おじさんの胸の奥にだけしまっておいて下さいませ」



與平次の茶屋(現在は富士本屋旅館)

4、佐藤 順一

～通年観測への道を開く～

明治5(1872)年、福岡県に生まれる。東京物理学校卒業後、大分測候所技手として気象界に入る。

明治34(1901)年、山階宮菊麿王が創立した筑波山気象観測所に入り、高山気象観測にあたる。この頃より高層気象観測の意義を度々論文に発表する。

退官したのちは中央气象台嘱託となり、富士山頂の通年気象観測計画を推進する。

昭和5(1930)年1月、強力の手房吉を伴い34日間の富士山頂越冬観測に成功、この時、両足に凍傷を受け、これは新田次郎の小説「凍傷」に詳しい。

佐藤の成功は私財を投じて富士山頂観測所の創設を支援した東京自動車学校長鈴木靖二の力に負う所が大きい。



佐藤 順一

(1) 佐藤の凍傷

(新田次郎「凍傷」より)

旅館で靴を脱いだ佐藤順一は乾いた手拭いで、右足の指を長田輝雄に打たせた。長田の額に汗が出るほど打たせても血の色は通って来なかった。旅館の主人が長田に代わって両手で揉んでみたが、ついに感覚はもどらなかった。

「もういい・・・」

佐藤は青白く変色した五本の足指を恐ろしい眼をして睨みつけて言った。

「先生、医者を呼びましょう」

長田は佐藤の足を取ると足指を両手でしっかり挟んで胸に抱くようにしながら言った。佐藤はだまって首を大きく振ってから傍に立っている宿の主人に、

「上りの一番は何時だね」

と聞いた。上りの汽車まで三十分あった。佐藤は眼をつむった。間もなくおしかけてくる新聞記者に「佐藤技師凍傷」と書いて貰いたくなかった。そんなことが永年観測所設立に何かのわざわいになりそうな気がした。

(2) 富士山頂観測所設立へ

佐藤の冬期滞頂観測の成功は、今まで逡巡していた文部省と大蔵省の当局を相当強く動かしたようであった。富士山頂観測所の予算案を持って折衝に当る気象庁の奥山事務官も、人命の安全性について相当強くつっぱることができた。

(富士山の気象観測の重要性は認めるが、人命の安全が期せられない)

この理由が三十年来、十万円にのぼる予算額の成立を妨げていた大きな要素であったが、もはやこれだけで予算を却下することはできなかった。佐藤は奥山事務官と実情説明にしばしば文部省を訪れた。三月も終わりに近づいた頃、文部省の会計課の部屋で奥山と佐藤が富士山観測所の予算の説明を終わっ



臨時富士山頂観測所

た時であった。登山の好きな予算掛員の波土島が佐藤に向って、「佐藤さん、今度の下山の時、凍傷にやられたそうですが、もうすっかりいいですか」

と聞いた。右足を引きずって歩く佐藤はしばしば同じような質問を受けたが、凍傷したというだけで、くわしいことは言わなかった。(右足の指はすべて切断されていた。)

文部省の腹は气象台案を呑むことになった。コペンハーゲンの国際学術会議で日本が第二極年に参加し、その第一に富士山頂の気象観測に取り組むことになった。

5. 外山 清氏

～富士山観測所建設の生き証人～

外山氏は現在88歳である。昭和7年外山竹二郎に従い山頂観測所建設に加わる。父竹二郎は大工の棟梁として国に観測所建設を要請され、3万円で請け負い、御殿場の大工仲間を集めて建設に着手する。

東安の河原の観測所の骨組みはいったん駅付近の空き地で組み立て、それを山頂に揚げている。山頂の現場監督は的場忠雄だった。

清氏はこの時若干15歳、剣ヶ峰移転の時は20歳である。作業は小雪舞う10月まで続けられ、ノミを持つ手が震えたと言う。また、飯場の中では炭を大量に使うため中毒死寸前に陥ったこともある。

その後、清氏は国鉄関係の仕事に携わっていくが、竹二郎が怪我で引退した後、建築事務所を開き、現在は静岡県建築士会の重鎮である。



外山 清氏

(1) 東安の河原観測所の建設

(気象百年史資料編より)

第1次、第2次の現地調達を採り入れ、三浦喜一の構想のもとに吉田満成が設計した新庁舎は木造平屋で将棋の駒のような形をしており、建物の全面はトタン張りとして、これを建物の周りに埋めた太い銅線につないで避雷の役目をさせた。また、保温のため床には2寸厚のコルクを敷きつめ、内部の羽目板は圧縮繊維張りとした。

工事は昭和7年7月5日、中央气象台長代理三浦喜一、棟梁外山竹二郎らが参列して地鎮祭を行い、6日着工秋に完成した。山頂の観測所は「野中小屋」と鈴木への寄付した「佐藤小屋」を改造し寝室、倉庫、発電室に充て、佐藤小屋の東側に測風塔と事務室からなる新庁舎を増築したものから成り立っていた。

山頂と同時に8月には御殿場口中腹の五合五勺と七合八勺目に登下山のための避難小屋が建てられ、これらの小屋と山頂、強力な梶房吉の自宅、御殿場警察間に新設された有線電話が引き込まれた。

(2) 剣ヶ峰観測所の建設

文部省は山頂の観測所を東安の河原から剣ヶ峰に移すために移築費の予算外支出の勅裁を要請して許可された。これについては、次のような記録がある。

「中央気象台付属富士山頂観測所において最近庁舎床下より噴気のため観測に支障を生ずるに至りたるを以て、之が移築費の予算外支出を要し、その金額8,400円也を第2予備金より支出の儀本年（昭和10年）6月24日勅裁を経たり」（測候時報 第6巻第14号）

東安の河原の庁舎を移転しなければならない表面の理由は「噴気のため観測に支障を生ずる」ことであったが、本当のところは、山頂を代表する風向、風速を観測したいというところであった。

剣ヶ峰庁舎の建設は文部省建築課池松治四郎監督のもとに東安の河原と同じ外山大工が請け負い、昭和10年5月整地作業を開始し、11月20日までに外装がほとんど完了して、翌11年5月再開、秋までに

完成した。

剣ヶ峰新庁舎の構造は東安の河原の例にならない西側のすそを張り出しにし、その配置は1号舎（観測、事務室、寝室）と2号舎（動力室、蓄電池室、倉庫）に分け、この庁舎間のつなぎ廊下部分の屋上には西側へ向けて階段を着け、登山者の展望の便を図った。

新庁舎も建って常時運営が確立したため、昭和11年7月15日、文部省令第14号及び文部省告示292号をもって「臨時富士山頂観測所」の「臨時」が外され、常設の観測所となった。



山頂の外山竹二郎（前右）と大工仲間

6. 藤村 郁雄氏

～所長30年、測候所の歴史そのものの人～

大正15(1926)年、盛岡を出て中央气象台付属気象技術官養成所に入学。この年富士山に登山。卒業後、中央气象台測候係に勤務。臨時富士山頂気象観測所の時代から夏も冬も山頂での気象観測に加わる。

富士山頂に魅せられ、一生の仕事としてこの地の気象観測に取り組んだ。研究心旺盛で風速計や雨量計などたくさんの観測機器の改良を行った。また、文学的素養もあり、「富士山頂気象観測の歌」は彼が作詞したものである。

しかし、何といっても彼の最大の手柄は第二極年終了とともに終わることになっていた富士山頂の気象観測をなみなみならぬ情熱をもって永続的なものに変えさせたところにある。



藤村 郁雄氏

(1) 観測継続を勝ちとる

(気象百年史資料編より)

極年観測は、昭和8年8月をもって終了するのであるが、12月末まで観測を続行することとなり、最終勤務の班長藤村郁雄は「物品管理を命ず。12月31日限りにて運搬可能の器材物品を荷下げし、その他は厳重に封印のうえ下山すべし」という辞令を受けて登頂した。しかし、藤村は「物品管理の責任を遂行するため山頂滞在を続けたく、下山は安全運搬の目途のつく時期を待ってする予定につき滞頂の御許可を御願ひ致し度く……」という請願を下山の菅原に託した。この請願に答えて「1月6日、三宅恒夫、水野保、藤原寛人(後の新田次郎)、長田輝雄を派遣するにつき交代下山すべし」という命令が出された。このような経過の陰には、秘められたエピソードがある。極年観測終了予定の8月末から9月初めにかけて、藤村、三宅、村瀬等が前後2回にわたり岡田台長を訪ね、山頂観測の継続を訴えた。

「富士山頂の観測を続けさせて頂き度うございます」「予算は既に打ち切られている」

「昭和8年度分の食糧、燃料及び器材は全部運搬済みで、少し人数を減らせば来年の夏までは優に滞在できます」

「物資はよいとしても人件費が問題である。」

「私どもはみんな下宿住まいで、毎月棒給を頂いております。山に出かけても何らお金に困りません。おまけに山には食糧や燃料が十分ありますから人件費は不要です。ただ山頂に行きますことだけをお認め下されば宜敷うございます。」

「君たちがそういう決心なら何とか話してみます。」

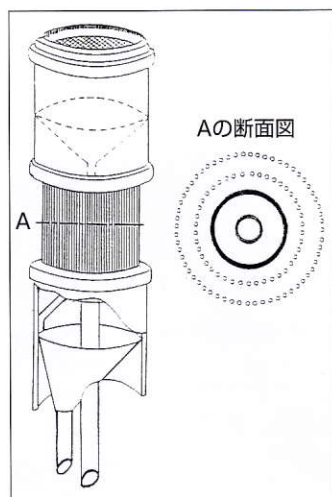
ということで、岡田は、藤原咲平、奥山奥忠と協議の上、三井報恩会の米山会長及び山口理事長に事情を訴え、1ヶ年分の山頂観測維持費として7,000円寄贈の決定を見たのが、12月の半ばであった。寄付採納については、文部省の本田弘人の尽力が大きい。

仮に、このことがなかったとしても、12月の滞頂勤務者藤村、村瀬、松井、桂の4名は越冬を続ける覚悟であった。

越年観測の国際協力業務は、一応終了したにもかかわらず山頂における気象観測が、青年観測者の熱意と三井報恩会の援助によって引き続き維持されたという感動的な事態にかんがみ、文部省は昭和10年以降の経費を定常的に計上した。

(2) 観測機器の改良

低温、強風下の山頂では平地の器具は役立たない。左図は横なぐりの雨をも測定できるよう藤村が改良した山岳雨量計である。



藤村式雨量計

7. 芹沢 早苗氏

～山頂の美に魅せられて35年～

昭和17(1942)年から昭和52(1977)年まで勤務。班長、電機係として富士山測候所の進歩発展に多大な貢献を果たす。

下界の世俗的生活にあきたらず荘厳な山頂の環境に身を置くことを愛した。特に、日の出から夕暮までの山頂の風景の微妙な色調の変化に心を奪われること多く、その感動を写真という形で永遠化することに心血を注いだ。

その情熱と優れた撮影技術により生み出された傑作の数々は後年「富士山頂写真集」として出版され、今も高い評価を受けている。

山頂生活における体験が豊かなため、各地からの講演依頼も多い。

(1) 富士山頂写真集より

序によせて

芹沢 早苗

山頂での勤務を終え、懐かしい人里に降りて来て、肩に喰いこんだリュックをおろすと、背中をスーッと伝わるような風が吹きぬける。靴をぬぎ、愛用のピッケルを立てかけて、フーッと深い深いため息をつく。

思えば35年の永い年月、よく事故もなく生き続けてこられたものと不思議にさえ思われる。永かった、又、短かったような年月でした。ふと気がつくと、テーブルの上にいるの間にか、妻が入れてくれたお茶が置いてある。

いつの頃だったか「よし俺は誰も撮ったことのない富士山頂の生きた写真を撮ろう」と思い立つ。今まで使ったカメラは13台程。今、そのほとんどは使用不能になったり、壊れたりして手許にはその残骸すらない。只、撮ったフィルムだけは茶箱にほおり込んで後生大事にしまっておいた。だが、保存の悪さのため、ほとんどがカビが生えたり汗をかいったりして、ひとかたまりのブロックになって、とても手におえない始末。それでも一枚一枚はがしては透かして見たりして、その時々思いにふけったりした。

定年を迎えた今、皆様の「何とか本にしたら」との一言で意を強くして、素人の私が日本一の富士山頂の写真の本にしようと思案したのだが、何分にも初めてのことで、たくさんの中から特に美しい風景を抜き出し、それに動物、夢のスキーなどを加えて見ました。御覧していただき、少しでも山頂の自然を想像していただければ幸いです。

(2) 山頂勤務の思い出

芹沢 早苗

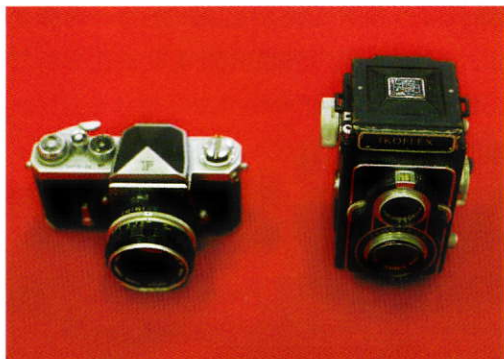
私が入ったのは御殿場に事務所が出た翌年の昭和17年6月でした。観測所とは気温、風、雨、雲等測る所と考えておりましたが、当基地ではそれは副業務でした。とに角、山頂の観測に支障をきたさないための支援基地だと分かりました。山頂勤務中も強力不足のため、職員が交代で荷揚げする状態が大半続きました。

(中略) 山頂勤務は木炭ストーブ一個とこたつ一個で寒く、ほかに風呂もなく、顔は洗わず歯も磨かず、考えて見れば無精者には最高でした。厳しい山頂生活は私を鍛え、今も医者の方の世話にならず薬も飲まず百姓に精を出せるのも富士山に勤務できたからと感謝しています。昭和52年には岐阜に転勤しました。この岐阜勤務から御殿場に戻り、久しぶりに仰いだ富士山はやはり何ものにも代え難いほど美しいものでした。

(富士山測候所創立60周年記念文集より抜粋)



芹沢 早苗氏



芹沢早苗氏が愛用したカメラ

8. 長田 昭典氏

～富士を鑑に生きる元測候所員～

復員後の昭和20(1945)年から昭和31(1956)年まで、昭和36(1961)年から昭和39(1964)年まで、昭和63(1988)年から平成元(1989)年まで富士山測候所に3回勤務する。

しかし、地元出身の職員として、この人ほど多くの気象官所に転勤した人はいない。それだけに、生来ずっと仰いできた霊峰富士に対する思いの深さは並ではない。富士は体の一部だと言い、富士離れできない子供だという。叔父長田輝雄を呑み込み自分をも散々苦しめた山であるというのに。

昭和33(1958)年の叔父の遭難は輪島の測候所で聞く。衝撃であった。子を思う長田の父は息子の富士山測候所復帰に強く反対するも、東京勤務に異動した本人は一体勤務体制とはいえ、再び憧れの富士をめざす。

長田は昭和63年に第17代の富士山測候所所長に就任。退官後も「富士山自然誌研究会」に属し、今も富士山から離れることが出来ない。

富士山の思い出

長田 昭典

私が交代の強力をやるようになったのは、九州大隈半島の鹿屋飛行場勤務から帰ってからのことである。最初の登山が昭和22年の11月、8貫位を背負子につけて胸つき八丁を一折一折と進む。芹沢早苗さんが勇気づけて下さったことが今でも脳裏に焼付いている。本当にありがとうございました。

新東宝と言う映画会社が「富士山頂」を製作したことがある。丁度交代時期と重なったため大変な想いをした。早朝、太郎坊を出発した私たちは七合目付近から突風を伴った強風の中、七合八勺の避難小屋の真下まで登った時、班長と私の不気味な音をたてながら下りてくる突風に気付き、ピッケルを斜面に打ち込み身を伏せてやり過ごした。やれやれと一息ついた瞬間、宝永の火口から巻き上げてきた突風が腹部アノラックの隙間から入ったからたまったものではない。二人とも鯉のぼりと同じ状態になり、空中にほうり出されて滑落、七合四勺近くの竜巻があげた穴にはまって助かったことがある。しまったと思う一瞬の間に今までの生きざまが走馬灯の如く、カラーから白黒、そして灰色へ、やがては真黒の世界へと移り変わって行く。必死に滑落に対応する自分と冷静に見守っている自分がいたことは実に不思議なことであった。やっとの思いで七合八勺の避難小屋にたどりついたものの、この道のりの長かったことは言うまでもない。

《遭難者との出会い》

正月も7日を過ぎ、夕食が始まったとき、顔面蒼白、半狂乱の若者が測候所に飛び込んできた。種々話す言葉の端々から緊急事態の発生を悟る。御殿場に連絡する一方、当直を残して二人組みになってお鉢を一周するも人影なし。

翌日もお鉢と噴火口の搜索を行った。三日目に梶房吉氏らの搜索隊が七合八勺に登山してくることに

なり、連絡のため、輝雄叔父と長田尾根を下山。梶氏と連絡をとり測候所への帰路につく。尾根の黒岩を登り切った所のたるみに入る横道付近に頭を北に向け横たわっている遺体を発見。冥福を祈って直登山にかかる。雪面にフォークが突きささっており、そこから20m位上にアノラック姿の中学後輩の岩城君が素手のまま両手でグリセードして止まっていた。「明日は迎えに来るよ」と言葉をかけて帰頂する。

大自然の恐怖をあらためて思い知らされた体験であった。

(創立60周年記念文集より抜粋)



長田 昭典氏



御殿場口の富士

9. 伊倉 範夫氏

～荷揚げ業務を全うした運搬組合長～

御殿場市原里出身。昭和12(1937)年から馬方として山頂観測所への物資の輸送に務める。初め、臨時の立場であったが、勤勉誠実な人柄が買われ、昭和21(1946)年に正式な運搬員となる。

馬方になったきっかけは身体が小さく乗馬を行っていたからである。当時、馬方は4人おり、太郎坊から七合八勺まで一頭がおよそ35貫の荷を運んだ。そこから頂上まではやはり4人の強力が荷を引き上げていた。

夏場の天気の良い日は毎日のように運んだ。朝、6時に太郎坊を出発、帰りはおよそ15時頃であった。冬の朝は暗く、馬に道を教わりながらの輸送であった。どの馬も可愛いものだったとしみじみと述懐する。

運搬中の事故はなかったが、疲労から倒れる馬や霧の中から突然現れた登山客に驚き暴れる馬がいたと振り返る。

戦中から戦後しばらくは東京からの所長は乗馬登山が普通であった。常々世話になっていた長田輝雄さんに真夜中に依頼され、その馬の手配をしたこともあったと言う。



伊倉 範夫氏



伊倉範夫氏への感謝状

昭和37(1962)年になるとこの運搬の仕事に一つの変化がおこる。馬小屋の整地を行っていたブルドーザーが試しに富士へ登ると、これが意外と富士の急斜面を苦にしないことがわかる。こうして、富士山レーダーの建設資材の引き上げにブルドーザーが導入され、以後夏場は物資も山頂までブルで運ぶようになる。

馬好きゆえの葛藤はあったが、翌年ブル仲間に加わり、運搬組合長に推挙される。その優しい心根は人の苦難を見過ごすことが出来ず、度々登下山で苦しむ人を助け警察から表彰されている。

現役引退後の今もシーズン初めにはブル道作りを率先して行っている。

《山頂への資材運搬》

気象百年史より

レーダー建設工事で問題となったのは、多量の資材を山頂へ運ぶことであった。一年目には短時間に作業を終える必要がある生コンクリートや大きく重い鉄骨はヘリコプターを利用したが、天気条件に左右され、作業が順調に進みにくいことと、費用が高くつくことなどの難点があった。

初めは九合目まで新しく道を作って馬を利用し、それから上は強力によって荷揚げする方法を考えていたが、これも一荷物75kgが限度で大きいものは運べない。ここに登場したのがブルドーザーである。

ブルドーザーが急斜面に強いことはわかっていたが、平均斜度20数度、酸素が少なくなる富士山でどこまで通用するか疑問であった。ところが、昭和37年、太郎坊を整地していた馬方が、その時使ったブルドーザーで試したところ五合目まで登ることができ、改良すれば更に上まで行ける可能性があることがわかった。

こうして、昭和38年は七合八勺目まで道が開かれ、ここまでブルドーザーで、九合目までは馬、それから頂上までは強力によって荷揚げが行われ、2年目は遂に頂上まで達した。

その後、ブルドーザーによる山頂への輸送は伊倉範夫、杉山時道、高橋福雄、芹沢茂嘉等によって行われてきた。

※有人観測終了の年のブル運転の中心はこの伊倉氏の子息、秀雄氏が務めていた。



ブル点検を厳しく行う伊倉秀雄氏

10. 芹沢 茂嘉氏

～親子孫の三代にわたり荷揚げ運搬に尽くす～

父親の病気のため、十代から家業の馬方の仕事を引き継ぐ。今もこの仕事はブルドーザー荷揚げという形で子供に引き継がれている。

本人の馬方時代は10数年続く。馬は2頭飼っていた。馬にとっても右に左に折れ曲がる急傾斜の荷揚げの負担は大きく、背中がむける時もあり哀れであったと言う。

馬方は4人で構成され、その収入は4人で仲良く平等に分配していた。運搬は夏場に限り、その主な物資は冬用の食糧や燃料であった。毎朝4時起き、馬にえさを与え、荷づくりを行い出発する。馬は朝、昼、3時、暮、寝る前の5回えさを食べるので世話が大変だった。

昭和39(1964)年のレーダー導入時、馬からブルドーザーへの切り換え

は馬方それぞれに思いの違いがあり決定までには曲折があったがブル導入に踏み切った。可愛がっていた馬との別れが寂しかった。

ブル運転技術は川崎で講習を受け身につける。ブルドーザーを使つての富士山の荷揚げは非常に神経を使う厳しいもので一仕事が終わるとやれやれと安堵するのが常であったとふり返る。

夏の富士山で一番恐ろしいものは雷だった。馬方の時代、馬の首が引きちぎれんばかりに引っぱって下山した経験は二度や三度ではなかった。こうして今、生きているのが不思議な気がすると言う。

ブルの試運転をする若き日の芹沢氏

測候所への荷揚げに強い誇りを持っている。「荷物を絶対、粗末に扱ってはならない」が彼の信条で若い仲間にはこのことを口癖のように話して来ている。

平成14(2002)年に怪我をして、伊倉範夫氏とともに現役を退き、この仕事を長男に託す。

現在、地元財産区議会の副議長を務める。



芹沢 茂嘉氏



11. 神戸 良市氏

～裾野市出身の元測候所員～

昭和20(1945)年9月、海軍省を除隊。海軍では無線技師であった関係から気象庁に勤務することになる。初め三島測候所に配属される。中央気象台の職員の自宅や下宿の多くが焼失しており、山頂勤務の交代出張が予定通りいかななくなっていたため、三島測候所の職員と御殿場の職員が一緒に富士山頂の勤務にあたることになる。

富士山観測所とは絶えず無線連絡を行っていたため、山頂は身近に感じていた。昭和23(1948)年3月から山頂勤務が始まる。この日は好天で苦もなく山頂を征服する。避難小屋などは素通りであった。

しかし、富士の自然は決して甘いものではない。何回目かの交替時、頂上の平地に着き、気を抜いた瞬間突風にあおられて、あわや噴火口に転落というときピッケルの先が蒼氷にかかり助かったこともある。

このように、辛く厳しい思い出は山ほどもっているが、最大の痛恨事は同僚長田輝雄氏を失ったことである。あの時のことを思い起こすと今も涙が出ると言う。高齢だった長田氏の遭難は自分の体力を常に意識しての山頂勤務となり、衰えを感じた45歳をもって職を退く。気象レーダーが完成し、華やかに活動を開始した昭和40(1965)年のことであった。



神戸 良市氏

12. 大胡田 警吾氏

～仲間の信頼あつき名強力～

昭和21(1946)年から昭和51(1976)年まで勤務。終戦の翌年、長男ゆえの責任感から8人家族を養うには普通の職では無理と考え、高収入の強力を志願する。小学校の同級生に富士山観測所の所長のお嬢さんがいて観測所を身近に感じていたことも動機の一つになっている。

強力の仕事が熟達するまでには数々の試練があった。夏は荷上げの量が多くなるため、自家の馬で応援したところ、馬方達との間にトラブルが発生したこともあった。

夏は所員の越冬のための燃料や食糧をかつぎ上げる。七合八勺からは上は馬が登れないので4人の強力負担は大きかった。七合八勺の小屋に滞留し、測候所まで何百俵もの炭を上げていたので身体は常にまっ黒の状態だった。

長期におよぶ強力生活と旺盛な研究心のため吹雪の中でも道を間違えない。また、身体すこぶる壮健で仕事を決して休まず確実に荷揚げするため同僚からも測候所からも絶大な信頼を受けていた。

こんな思い出もある。昭和39年レーダードーム建設のため、ブルドーザーが導入される。ブル道を伊倉さんと切り開いていたところ、富士宮浅間大社から猛烈な抗議を受ける。八合目からは浅間大社の所有なのである。計画は頓挫しそうになるが気象庁の必死の働きかけにより大社の許可が降りる。

こんなこともあった。雑誌社の取材をガイドしているとき、突然頭上で大音響。見上げると、BOACの機体が空中分解していた。夢中でオリンパスペンのシャッターをきり撮影に成功した。そのネガの借用を依頼され貸し出し、多くの新聞社から感謝された。

富士山御殿場口の強力

(静岡県史より)

富士山頂での気象観測に必要な機材・食糧などは、以前はすべて強力の背によって運び上げられていた。しかし、昭和39年に山頂にレーダーが完成した頃を契機として人力に頼った荷揚げの時代は終わり、強力存在は歴史的なものになった。大胡田警吾さんは、戦後まもなく強力を始め、強力終焉の時代を体験した、いわば最後の強力ともいえるべき人である。小柄な体格と柔和な顔つきには、ゴリーキといういかめしい響きはそぐわない感じがするが、その表情の裏には、アイゼンさえ受けつけない青氷に固められた厳冬の富士山をかぞえきれないほど、登り下りした強い意志が隠されている。

ショイコとピッケル

自分のショイコは自分で設計して大工さんに作ってもらう。ユキノキという木は中が黄色でちょっと重



往時を語る大胡田氏



大胡田 警吾氏

いけど粘りがあってよいというので馬の鞍によく使われていたが、それで作ってもらった。普通のショイコは親木(両側の柞木)の中に横木が三本わたしてあり、下の二本のヨコギの間に縄を巻いてある。しかし、警吾さんは横木を四本つけて下の二本には縄を巻き、その上の横木には歩行中に左肩にのせたピッケルをあてがって左肩に荷重を分散させた。利腕の方の右肩がどうしても疲れるからだ。また、休憩の時にはピッケルの石突を地面に立て、ピックの部分

をショイコにあてがって立ったまま肩を浮かせて休む。普通の強力も棒を同様に使っており、警吾さん達のピッケルを見て欲しがったものの、買えるような値段ではなかった。警吾さん達は測候所から給付されていたのである……。

13. 田代 忠作氏

～混乱期の測候所を支える～

昭和17(1942)年から昭和62(1987)年まで測候所の業務課に勤務。戦時中と終戦後の物資不足・人不足の時代に食糧集めや人集めに奔走。観測の継続はひとえに自分達の手にかかっているという使命感をもって奮闘する。

当時、戦争による男子不足で事務所内は女子ばかり。責任は重く、知人を頼りつつ昼夜兼行で市内はもとより小山・裾野方面にもおもむき、人・食糧・燃料の確保に努める。輸送手段は自転車とリヤカーであった。

戦後、しばらくは印野の北畑に2町歩の農場を開き食糧を所員の手で生産する。基地事務所、太郎坊小屋、山頂観測所を加えての4ヶ所勤務の負担は重く家庭生活などなきが如くであった。太郎坊につめていたとき、山頂で使う炭を営林署の某から買い警察に始末書をとられたこともある。

当時は山頂も人手不足であった。交代員が来なくていく日もいく日も滞留しなければならぬことがあった。その時は「二度と山頂勤務などするものか」と思うが、次の交代時が来ると確実に足は山頂に向ったと振りかえる。やはり、この人も富士山の魅力に取り付かれた一人なのである。

現在もNPO法人「富士賛会議」の会員として活躍する。

終戦間際の富士山測候所

田代 忠作

昭和17年8月地元の御殿場事務所に採用となり月給28円でした。富士山測候所運営のための物資補給が主たる業務でした。入所当初は町内の店でも、優先的に品物を回して下さったので、集荷したものを荷造りしては運搬業者に渡しておけばよかったのですが、戦争が激しくなってくる19年頃からは強力も居なくなり、物資も乏しくなってきました。交代時期になると須山から足柄方面までも知人を頼り、リヤカーを引き、物資の調達に出掛け帰りは21時か22時になってしまうことがしばしばでした。米や茶、砂糖、油等は配給になっておりましたので少ないながらも助かりましたが、今度は物資を運ぶ強力がなく、職員が交代で行う事になるのでした。

夏は馬で七合八勺まで運び、それからは強力に頼るのですが、夏場は何とか山梨県明日見村の人達に応援を頼み過ごせましたが冬山は皆無の状態でした。当時、山頂勤務は一ヶ月交替で半数ずつの交替となっていました。交替日には職員が交代で強力の代行を、又勤務員も自分の荷物の他に必要以上の荷物を背負って、此の急場を凌ごうと頑張っていました。交通機関や荷物集荷のため出発が毎度夕方になり、太郎坊への到着が20時頃になってしまいます。暗闇での炊事で炊いた御飯にボーフラがちりめん干しの如くに交じっていることもありましたが、これは水面に振動を与えて使用し解決しました。

必需品の補給は、人手不足のため測候課をはじめ県内はもとより諏訪測候所等から5日ないし1週間位の期間にわたり頑健な職員の応援を得て、長田輝雄さんの指導で遂行して参りました。昭和19年4月11日の今

村一郎氏の遭難は此の様な最中の出来ごとでした。この時、救援の4名の職員も健康を損ね長期療養となっていました。

昭和20年には木炭が山頂に届いてないことが多く、空きの日に頂上まで運んで行きました。食糧は合間を見ては七合八勺まで揚げなければなりません。まさに、その日暮らしといった生活状態でした。

勤務を終わって重い足どりで滝ヶ原に下ると、野犬が私たちの何ともいえず体臭に群がってきます。ピッケルを振り回して追い散らしてきたのも夢物語となってしまいました。富士山頂観測所時代の一コマです。(富士山測候所創立60周年記念文集より抜粋)



田代 忠作氏



登山基地太郎坊の小屋

14. 永井 亨氏

～米軍グラマンの機銃掃射で負傷～

昭和20(1945)年から昭和46(1971)年まで技術員として勤務。17歳の時、富士山頂観測所の存在を知る。採用されて、御殿場事務所で気象観測の基礎を学ぶ。初登頂は20年の4月。雪山の苛酷さを思い知る。

7月30日の朝8時03分、観測所が米戦闘機に襲撃される。4号舎のコンクリート通路へ避難するも、機銃弾が貫通し、コンクリートの破片により顔面と手の甲を負傷する。治療のため下山し医師の診断を受ける。医師は顔にあざが残ると言うも、色々の葉草を煎じて毎日患部に塗布した母の献身的努力により見事に消える。

昭和21年の小出六郎氏の滑落による殉職は滑落時の対応についての多くの教訓を残した。永井氏も昭和26年に滑落するが、その時の教訓を生かしてピッケルを合理的に用い、大事に至らなかった。

このように山頂勤務における苦労話は枚挙にいとまなしたが、昭和41年12月、仲間の一人が急性肺炎になったとき、ホバーリングしているヘリコプターに強力たちと乗せた出来ごととも強烈な印象として残っている。

山頂の苛酷な自然にも耐えて測候所勤務に尽くし、この間観測の精度を上げるための様々な工夫を行う。また、千葉県柏市で厳しい研修を受け、幼き頃からの夢であった「予報官」の資格を取得する。その後、任地は羽田、名古屋の空港と変わり、三島の測候所長として終わる。

気象観測には数式やコンピュータでは計算不可能な人間の勘や経験に頼らざるを得ない部分があると、この度の有人観測終了を残念がる一人である。

米軍機襲撃と観測

20年になって敗戦の色濃厚となって来たためか、連日伊豆半島を北上し富士山頂に向かって飛来してくる敵機の編隊が見受けられるようになった。

これら戦闘機にも慣れての油断か、7月30日朝7時50分、甲府方面の空襲を終え、駿河湾に向かって行く敵機を見ていた。そして、観測時刻の8時になったため、気温と雲の観測をと身を庁舎の屋根越えに乗り出した矢先、突然二号舎上空方面からの機銃掃射があった。三角点付近は一時硝煙で霞んでいた。

襲来機の頭上通過後、反転するすきに玄関から庁舎に飛び込む。中はほこりの渦で、観測机は倒れ、椅子はストーブ近くに飛ばされ、窓ガラスの破片が散乱しているが人影はなかった。安全場所を求めて四号舎の通路に入る。仲間はこちらにいた。入るや否や、反転した二度目の機銃掃射である。通路のコンクリート壁の厚さを頼りに避難したのだが、このコンクリート壁が二ヶ所打ち抜かれる。大丈夫かという池田さんの声に顔を上げると、コンクリートの破片が昨夕登山してきた永井さんの顔面に突き刺さり点々と血が滲んでいた。炊事の鈴木さんも足に機銃弾の跳ね返りが当たり負傷していた。

本当に瞬時の出来事だった。敵機は銃撃後、南西方面に去る。次の観測時刻が来たので気が気でなく百



永井氏らを襲った機銃弾（田代氏蔵）

葉箱の鉄蓋を上げると爆音がするので引き返すこと再度、百葉箱は銃撃によりかなり壊れたいたが、寒暖計や自記器類は不思議なほど異常がなかった。かろうじて通報時間に間に合った。今に思えばこの一時間が欠測だったら今までの継続された統計がふいになってしまった事を思う時、観測は身を挺してこそ価値が残ることを痛感した。

物的被害は弾痕110ヶ所、ガラス破損22枚、その他無数の穴があり、スースー隙間風が入り、この冬はことのほか寒かった。

（田代忠作氏「富士山測候所創立60周年記念文集より」）



永井 亨氏

15. 勝又 好孝氏

～測候所勤務は偶然の出会いから～

昭和30(1955)年から平成7(1995)年まで勤務。若き日、都会生活に憧れ埼玉の本屋に勤めていた。神田に本の仕入れで来ていたとき、路上でたまたま上京していた叔父長田輝雄とばったり会う。この時、測候所勤務を強く奨められ、この道で働くこととなる。体力的にすぐれ、「橋本杯」などのマラソン大会に出場していた自信もこの激務に耐えていく根拠になっている。

初登頂は真冬の2月26日であった。太郎坊を午前2時半に出発する。身を切るような寒風が吹きすさぶ中、山頂付近にはさえ渡る月影があった。生れて初めて装着したアイゼンに慣れないピッケルを持ち、27kgの荷を背負っての冬山はきつく喘ぎ喘ぎの登山となる。標柱あと何本で頂上だ、あの岩陰をまわれば頂上だと励まされ(誤魔化され?)て、ようやく登頂すれば、測候所のある剣ヶ峰まではもう少しだとの御託宣。半泣きで馬の背を登り始めたとき、応援にかけつけてきてくれた芹沢早苗さんに助けられたうれしさは今も忘れていない。頂上到着は午後7時30分であった。

この強力体験初日の苦しさにより山頂勤務を一旦はあきらめるが、春めく気候とともに再度の挑戦となる。こうして、漸次強力の仕事に面白さを見い出し、やがて天職と思うようになる。

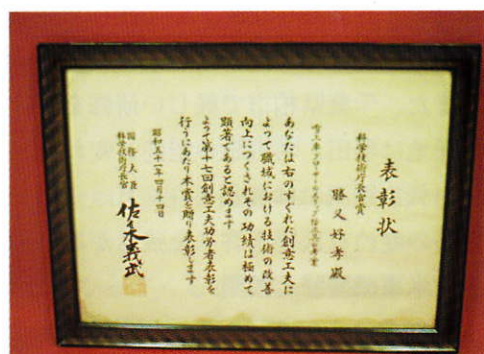
しかし、昭和40(1965)年1月7日、思わぬ強風に荷をすべらせ紛失。測候所の「弁証しろ」が納得できず強力の仕事をやめる。しかし、測候所の方で英語を話す業務員が必要になり、多少話せたため2月1日付で採用される。

仕事は運転手を中心であったが、食糧調達、炊事、観測と何でも行った。昭和42(1967)年から導入された雪上車スノーキャットの運転も中心になって行った。スノーキャットは米国製であり、平地仕様に出ていたので横すべり防止の「つめ」を試行錯誤を重ねたのち考案する。製品は素晴らしく、勝又氏は後に科学技術庁から表彰されている。こうして雪上車は五合五勺まで登ることが可能になり、登下山の事故はなくなった。

勝又氏は平成7年度末に退職する。富士山測候所に定年まで勤め上げた数少ない一人である。



勝又 好孝氏



科学技術庁長官賞



雪上車スノーキャット

16. 堀江 幸雄氏

～雪上車改良に尽力～

昭和42年に導入された雪上車スノーキャットは平地仕様に出来ており、富士山に登るにはいくつかの改善を施す必要があった。この点を測候所の勝又好孝氏から依頼され工夫改善に着手。座席14人の所を10人に減らし、燃料タンクは車の中心に置く。バッテリーは車の前に付ける。左右のバランスに工夫をこらした結果、米国からの購入時に比べ外観は大きく変わる。納得いかぬ時は富士山のアイスパーンの所で動かして確認した。

改良までの数々の努力が認められ、平成元年に東京管区气象台から表彰を受ける。



堀江氏への感謝状

17. 平井 泰世氏

～新田次郎の小説に触発されて～

熱海市網代出身。高校生のとき、図書館で手にとった雑誌の何気なく開いたページが小説欄で、富士山頂の観測所勤務員を主人公にした新田次郎の「郷愁の富士山頂」であった。将来の職業選択に悩んでいた時であったので早速、気象台に履歴書を送った。大島測候所に勤務していたが、昭和31(1956)年4月5日、応援要員として念願の富士山測候所で働くことになる。その後、東京勤務に変わるが一体運営ということで度々山頂勤務を行う。こうして30年間何らかの形で富士山と関わって来た。人に依頼されたことは決して拒まぬ高潔な人柄だが、生来の楽道家で山頂勤務を面白がっている所があった。ただ、根底にはいくらかの冒険心と富士山頂での気象観測を担うという気概と強い誇りがあり、それが彼を支えてきた。

山頂生活での余暇を特技の「居眠り」で過ごして来たと笑うが、低圧・低温・低湿下の生活は勤務員の身体を痛めることを実感して来ている。呼吸、脈拍は3割増しで思考は長く続かない。平地の5割増しの食事を摂っているのに、下山時は数キロも体重が減ると言う。

危険を伴うのは冬の交替時の登下山である。何度も恐怖体験をしているので普段はのんびり屋の彼も細かに神経をつかい名リーダー役を務めている。信心はあつい方ではないが、立ちほだかる富士の斜面を前にすると縁起さえかついだ。登下山時、必ず左からアイゼンの装着をするようにした。命をあずける登山具は、銀座まで赴き買う。ピッケルはタカハシ・カドタ・ヤマノウチなど高品質のものにこだわる。また、亜麻油を与え、ヤスリがけを行うなど手入れは決して怠らなかった。

平成4(1992)年に富士山測候所長に就任、平成6(1994)年に定年退職。現在、シカ・イノシシなどが出没するという自然豊かな伊東市十足の自宅で悠々自適の生活を送る。

富士山は美しく見えるか

平井 泰世

夜明け前に雪に埋れた太郎坊を出発する。生まれて初めての富士登山、しかも一面に積もった雪の上を歩くのも初めてのことだった。森林限界を抜け、間近に富士山を初めて見たとき、広い斜面だと思ったが高さは実感できなかった。たるみの大岩付近まで登ってきたときには疲労困憊の状態で、鉛色に光っている氷の急斜面でアイゼンの歯がたたず右足が滑り、反射的についた左手も滑り体制が崩れた。出迎えに来てくれた立石さんがとっさにピッケルを足元に打ち込んでくれたお陰で事なきを得た。この時、富士山は平地の日常感覚が適用しない場合がある世界なのだとおぼろげながらも自覚した。

それから、足かけ20年の山頂勤務で、霧と吹雪で方向を失ったり、腰まで埋まったラッセル、強風で身体が軽くなったり、旋風で一瞬空中に舞い上ったり、滑落をピッケルで辛うじて止めたりと、冬富士の自然を一通り体験した。また、ちょっとした不注意で、今でもぞっとする思い出を幾つか重ね、富士山の怖さが骨の髄まで染み込んでしまった。

このためか、雪の富士山を見ていると雄大で美しいと思う一方で、堅そうな雪質だな、風の具合はどうか、飛雪が巻いているのかな、何時しか自分が登山する対象としての山に見えてきてしまう。

もう、十年以上も前になるが、一緒に山頂勤務をしていたかつての同僚達と伊豆を旅行した。海岸から富士山が見え「富士山が美しい。富士山が懐かしい」とひとしきり富士山が話題になった時、私は無意識に「それにしても堅そうな雪だな」とつぶやいていた。

(富士山測候所創立60周年記念文集より抜粋)



平井 泰世氏



平井氏愛用の登山用具

18. 中島 博氏

～カンテラ日記を編集～

神奈川県藤沢市出身。測候所技術官養成所を卒業後、昭和16(1941)年中央气象台測候課に入る。富士山測候所には昭和17年から25年、昭和46年から48年に勤務する。46年からの3年間は所長であった。趣味は富士山と言ひ、その頂上で気象観測に取り組んだことに強い誇りを持つ。退官後の昭和60年には開設以来の所員の記録であるカンテラ日記を一冊の本にまとめる。自己の体験を踏まえて測候所で働いた勤務員の喜びや苦しみを温かみのある文体で再構成し、名著になった。富士をこよなく愛し、商業本位で富士を利用する人たちに強い憤りをもつ硬骨漢である。85歳の今も藤沢の自宅から見える太郎坊以上の富士の姿を記録し続けている。

「カンテラ日記」に拾う

- (1) 「カンテラ日誌」とは山頂に勤務した人が、毎日の出来事やその日の感想をつづった日誌である。
 - (2) カンテラとはオランダ語。ブリキの油つぼの中に石油を入れ、綿糸をしんとして火を点じ、携帯用としたもの。大正12年に懐中電灯が市販されるまで気象観測の照明用にもこれを使ったことの思い出として山頂の当番日誌にこういう名前をつけたらしい。
 - (3) 強力は、月に一度の職員の交代には器械や生鮮食料品などを背負って登り、その中間日にも手紙や食料を荷揚げした。そのほか、器械の部品などが急に必要になれば、その都度これを山頂に届けた。重い荷を背負って強風と低温の冬富士を登るのは、大変危険な仕事である。それなのに、この人たちは、日本一の富士山はおれたちの山だ、その山頂の仕事はおれたちで守る、という誇りと気概をもって、困難にくじけず強力仕事をつづけてくれた。彼らこそ、山頂勤務者がだれよりも頼りにした仲間である。
- 七合八勺から下で、夏のあいだ馬を使って荷揚げする人を「馬方」とよんでいた。馬と荷物に気をつけながらの山登りはやはり大変な仕事であり、彼らによっても観測所の仕事は支えられていたのである。

(4) 昭和41年12月15日のカンテラ日誌より

快晴。芹沢若郎の看護を徹夜で続けているが、体温は依然40.0度前後をつづける。薬も新しいものは使いきって、期限切れのストマイを昨夜から下界の医師の指示で注射している。体温はどうしても下がらず、何ともいいようのない心細さだ。

昨日御殿場をたった大胡田警吾、勝又好孝は、7時30分、二合八勺を出発。また、東京からは医師が出発という知らせがある。今日中に登ってきてくれることを祈る。11時、芹沢の体温は40.3度と最高になる。大胡田と勝又が新薬を持って12時10分山頂に着く、13時、医師の指示で新薬を注射し酸素吸入をはじめる。15時、芹沢の体温は37.7度に下がる。新薬の効果は大きい。東京の医師が田代忠

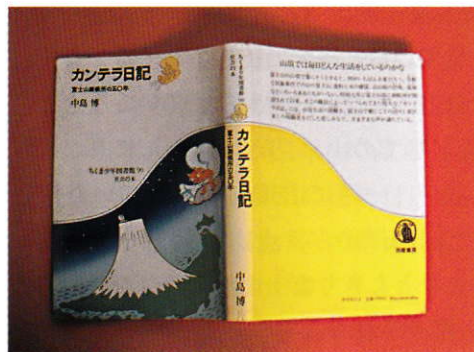
作、大胡田智寿の案内で16時10分に到着。病人は早速、医師の診察を受ける。これでひとまず安心。

- (5) 昭和50年代になると戦中あるいは敗戦直後から富士山測候所の仕事を続けてきた職員の転勤が始まった。この人達は富士山という厳しい職場で果たした命がけの仕事を誰に認められることもなく黙って山を去っていった。しかしこの人達の心の中に富士山は尊い存在として、いつまでも残り続けるに違いない。

(中島博著「カンテラ日記」富士山測候所50年より)



現役時代の中島 博氏



カンテラ日記

19. 滝沢 袈裟夫氏

～最後の富士山測候所長～

群馬県嬬恋村出身。気象予報士。平成16(2004)年4月から富士山測候所長として御殿場に赴任。赴任の朝、御殿場駅で見上げた富士の威容に感動している。在任期間は短い、初めて登頂したおり早速、頭痛・めまい・吐き気・息切れという高山病に襲われ、山頂勤務員の労苦を身をもって体験している。無人化の体制への切り替えを陣頭指揮してきたが、自身の気象庁勤務最後の年と有人観測終了の年が重なり複雑な感慨に浸る。この一年で富士山に対するイメージを大きく変えて御殿場の地を去る。



滝沢 袈裟夫氏

20. 西島 昇氏

～高さ日本一の名料理人～

東京都文京区出身。昭和56(1981)年に求人広告を見て応募。業務課員として採用される。山頂測候所では調理を担当。山頂での日々の気象現象の変化に心を奪われ、長期間の勤務になる。趣味も山登りになり、休日の多くを登山に費やしている。有人観測を惜しむ気持ちは強いが自分なりに精一杯やり遂げたという達成感をもつ。

ある日の西島氏 (カンテラ日記に拾う) 昭和58年4月20日

霧のち晴。本日夕刻から山本雄次の送別パーティーが開かれる。山本は処女航海の「しらせ」に乗船して南極の昭和基地に行く。南極では一年間ペンギンと仲よく暮らしてもらいたい。西島昇のオリジナル中国料理はなかなかうまかった。一同、カラオケで精いっぱい歌う。

21. 中田 晃氏

～家族の支援に感謝して～

千葉県野田市出身。平成4(1992)年から16年まで技術専門官として富士山頂に勤務。景色の素晴らしさから離れがたく12年間の激務に耐える。この数年、業務縮小続きで焦燥感を抱いていたので無人化には「ようやく」といった思いもある。しかし、残念な気持ちがないわけではないとも言う。富士山はたまたまの職場であったが、ここで働けたことに誇りをもつ。冬の勤務時など心配している家族の顔が浮ぶ。富士山頂で自分が働くことに誇りをもち、毎回温かく送り出してくれた家族に強い感謝の念を抱く。富士山との縁は今年で切れるが、厳しい山頂勤務で培った精神力を今後の人生に活かすと意を新たにしている。

22. 岡野 潔氏

～より正確な観測をめざして～

茨城県出身。平成3(1991)年から8年と平成15年から16年に東京管区气象台に勤務。併任ということから山頂勤務に加わる。当初、厳寒期でも室内が20℃に保たれている測候所の室内環境の快適さに驚く。



岡野氏らが用いたアマチュア無線機

しかし、長く苛酷な冬、激変する気象状況など時が経つうちに、山頂での仕事や生活が厳しく不自由なものであることを体感し、「恐れ」さえ抱くようになる。交替で下山したときの安堵感が何とも言えないと言う。強風下での測風器の霧氷落としは厳しい仕事である。防寒作業着を身につけ落とすのだが、室内機器の観測時刻が気になる。腕時計を防寒手袋の上につけたが普通のものはたちまち破壊される。腕時計ベルトを特注し、これが大変役立つ。富士山頂で奮闘した日々の思い出としてこの特注ベルトはいつまでも大切にしたいと言う。

23. 交替勤務の一日（最終年）



前日午後、御殿場基地事務所に集まる



所長 滝沢袈裟夫氏



技術課長 稲葉和弘氏



横木修治主任技術専門官(左)



基地事務所内のようす



綿密に登山計画を検討する



午後3時、出発を見送る



太郎に坊基地に到着



山頂の気象を電話で聞く



防寒具の説明をする佐藤班長



翌朝、山頂の天気を観察する



6:00太郎坊を出発する



ブルで頂上に向かう



ブルの中から頂上を望む



山頂測候所に到着する



山頂測候所の居間

24. 有人観測終了ごろうさん会



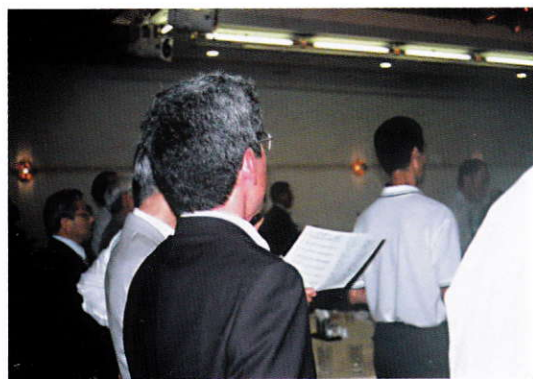
参集した方々のサイン



全員の記念撮影



所 長 挨 拶



富士山頂気象観測の歌を歌う



なつかしき再会 (1)



なつかしき再会 (2)



なつかしき再会 (3)



なつかしき再会 (4)

IV. 山頂における有人気象観測の終焉と今後の気象観測



牧之原気象レーダー観測所（静岡レーダー）

富士山頂測候所のレーダーは何故不要（無人気象観測は現在も行われている）となったのか、不要となった要素は多種あると考えられるが、気象衛星や、観測機器や通信機器等精密機器の精度の高さや、観測技術の発達、それに人的な問題、また施設の老朽化等も考えられるが大きな要因としては富士山頂レーダーの代替として静岡県の牧之原に1基、長野県の車山に1基気象レーダーが設置された事がもっとも大きな要因となっている。

それでは牧之原レーダー観測所（静岡レーダー）、車山レーダー誕生の経緯について述べると下記に記した要因が多くを示している。

静岡レーダーは、富士山レーダーの代替として誕生した。昭和53年に更新した富士山レーダー2号機は、20年間使用してきたため老朽化が著しく、そろそろ更新の時期にきていた。富士山レーダーは、遥か南海上から接近する台風の観測を主たる目的として整備され、その役割は十分果たしてきたが、台風の早期探知は、いまや観測技術の発達によって気象衛星で十分可能となっている。

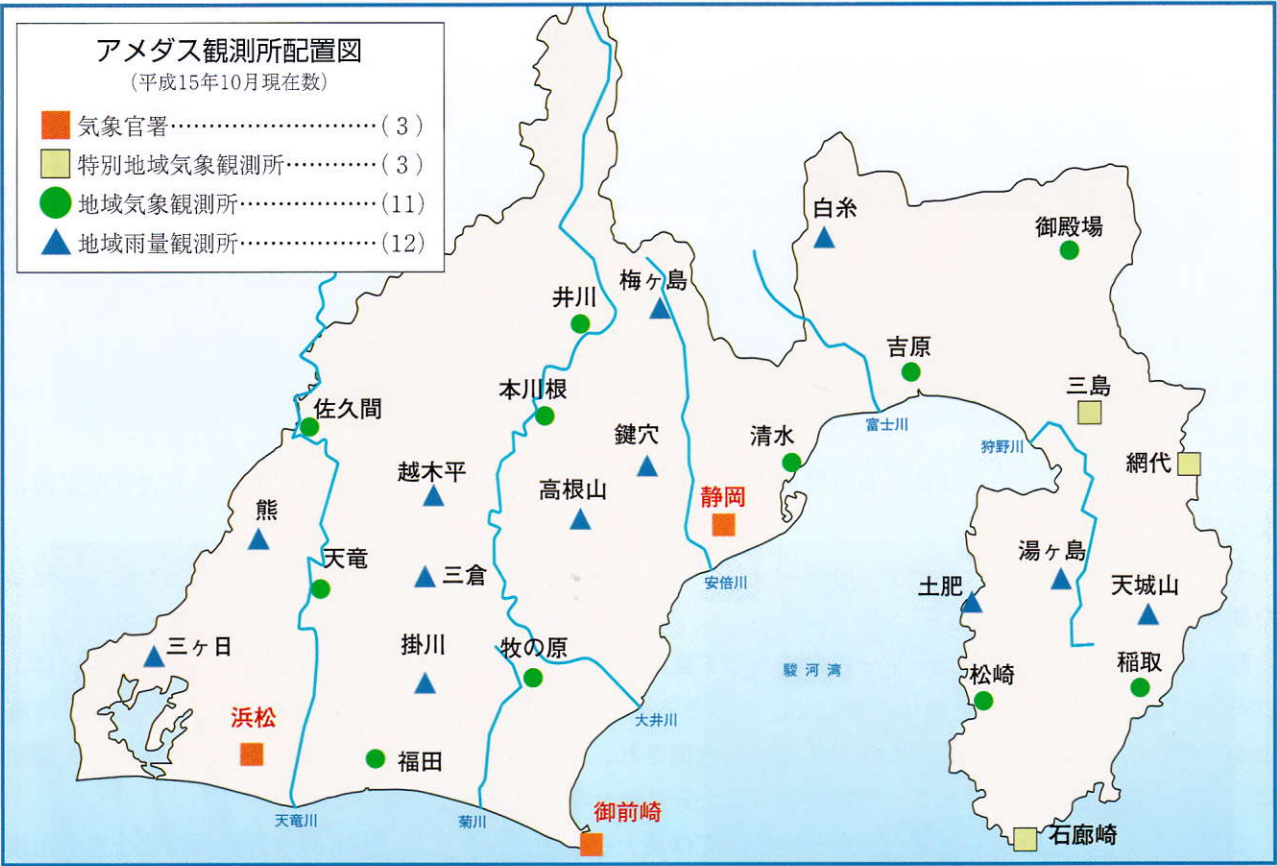
このようなことから、レーダー更新にあたっては莫大な経費がかかり、しかも維持管理に困難な富士山頂で更新するよりも、陸上や沿岸部で発生する大雨などの定量的な観測に適したレーダーを富士山レーダーの観測範囲とほぼ同等となるような場所に、新たに設置することが望ましいと判断され、その結果、静岡県の牧之原台地と長野県の車山の2ヵ所に設置すれば、富士山レーダーとほぼ同等の観測範囲が確保できるため平成10年度、11年度の2カ年計画で整備され、平成11年11月1日10時（日本時間）から運用が開始された。

牧之原台地に整備したレーダーを静岡レーダー、また、車山に整備したレーダーを長野レーダーと呼んでいる。静岡レーダーは遠隔制御監視方式のレーダーで通常は東京管区气象台及び静岡地方气象台でレーダーの制御監視などを行っている。

気象観測ではレーダーという「電波の目」を使って、現在どこにどのくらいの強さの雨や雪が降っているのかを常に見つめている。レーダーによる観測は気象衛星による宇宙からの観測とともに、地球の大気の中で何が起きているかを知る重要な手段となっている。気象庁では、このような観測を行う気象レーダーを全国各地に約20基設置し、加えて、昭和49(1974)年からアメダス（地域気象観測システム）と呼ばれる無人の観測所において、気温・降水量・風向風速及び日照時間等を観測している。また、全国約150ヵ所の气象台で、気圧・気温・風向・降水量・積雪・日照時間雲の量・形・天気などの観測を行っており、その殆ど

が自動化されている。降水量を観測する観測所は全国におよそ1,300カ所あって、おおむね17km四方に1カ所の割合で設置されている。そのうち、約200カ所では、積雪の観測も行っている。気象庁では気象災害の防止に向けて雨や風の状況をきめ細かく監視するため、気温・風向風速・日照時間を観測する観測所は全国におよそ840カ所あっておおむね21km四方に1カ所の割合で設置されている。そのデーターや気象観測衛星からもたらされた情報や、アメダスのデーターは、東京へ集められ電子気象情報として全国各地の気象台に配信され、天気予報や注意予報・警報などの発表に利用されている。

静岡県内にある気象観測施設配置図



施設名	所在地	施設の概要
気象官署		気象台や測候所のことで、有人による気象観測などが行われています。
特別地域気象観測所	三島・網代・石廊崎	風向風速・気温・湿度・気圧・降水量・日照時間・視程を、無人で自動観測しています。
アメダス		風向風速・気温・降水量・日照時間の4要素を観測している観測所と降水量だけの観測所があり、それぞれ無人で自動観測しています。
牧之原気象レーダー観測所 (静岡レーダー)	菊川市	電波が雲の中の水滴や氷の粒に反射する原理を利用して、半径300km圏内の雨雲の動きを観測します。

資料参照気象庁ホームページより

V. 特別展をふりかえって

富士山測候所が平成16(2004)年9月末をもって有人による気象観測を終了しました。それより前、平成11(1999)年11月に富士山測候所のもっとも中心的な施設であり、日本の気象観測の中心でもあった富士山レーダーによる観測が終了し、平成13(2001)年9月に撤去されています。

日本の気象観測史の上で富士山頂における気象観測はきわめて貴重な気象情報を提供してくれる観測所であり、昭和39(1964)年に建設された富士山レーダーにおいては、日本本土の約8割、半径800kmにもおよぶ観測網を持つ施設として活躍し、刻々と変化する日本上空の気象情報をいち早く提供してくれるレーダーとして、私たちにとって欠くことのできないものとなっていました。テレビやラジオから伝わってくる天気予報の中に「富士山レーダーによる」という映像や言葉を常に目や耳にしていたことを多くの人が記憶していることと思います。

富士山における気象観測の歴史は、日本における高所からの気象観測の必要性を認め、その観測地として富士山という極めて厳しい場所を求め、明治28(1895)年10月から12月に山頂での越冬観測の必要性を身をもって実践した野中至夫妻の行動をきっかけに、その志を継ぐとともに山頂での気象観測の重要性を訴え、昭和2(1927)年に山頂東安河原に観測所を建設するなど実行に移していった佐藤順一。さらに佐藤順一と中央气象台職員による冬期の観測が継続される中、昭和7(1932)年7月1日には中央气象台臨時富士山頂観測所となり通年観測が開始され、8月1日には第2極年観測の国際協力極地観測事業の本調査を実施しています。昭和10(1935)年から11年にかけては、富士山剣ヶ峰に新庁舎を建設し11年7月に剣ヶ峰に移転し名称を「富士山頂観測所」としています。その後も昭和15(1940)年静岡県御殿場市に御殿場事務所を開設、昭和17(1942)年に御殿場口登山道太郎坊に太郎坊避難所の設置、昭和25(1950)年に「富士山測候所」に昇格するなど着実に日本の気象観測におけるその必要性を高めていきました。昭和38(1963)年から39年にかけては日本の気象観測史上もっとも重要といっても過言ではない富士山レーダーの建設が進められ昭和40(1965)年に運用開始しています。

このように昭和7(1932)年中央气象台臨時富士山頂観測所として通年観測が実施され、それ以来、富士山測候所が72年間という歴史のなかでその必要性を認められ、これに対応するようにさまざまな人々の手によって観測継続のための惜しみない努力と協力があつたのです。野中至夫妻がはじめて富士山頂にて越冬観測を試みたときには、新田次郎著「芙蓉の人」にみられるように、中畑の佐藤家の支援と協力がありました。佐藤順一による観測にも山階宮菊麿王殿下による協力や、東京自動車学校長鈴木靖二による協力も忘れてはいけない支援ですが、これを元に富士山頂東安河原という極めて厳しい環境の中で実施された観測所の建設に携わった小山町須走の大工棟梁大森家の働きも、観測を実施するための大切な協力といえるでしょう。こうして佐藤順一と中央气象台職員による気象観測が山頂東安河原で実施されるようになると、昭和7年7月には現地にあった「野中小屋」「佐藤小屋」を改造、これに増築する形で新庁舎を建設します。このときも、御殿場から請負人福島一造、棟梁外山竹二郎があたっています。棟梁外山を中心とした大工たち、建築資材を山頂まで上げた馬方衆や強力衆など多くの人々の協力があつたことを知ることができます。昭和10年から11年における山頂東安河原から剣ヶ峰への観測所の移転、昭和39年富士山レーダーの完成にいたるまでには、富士山測候所員を中心に強力や馬方衆、大工、そして商店街や旅館など多くの人々がさまざまな形で測候所員による観測の継続のために協力と支援をしているのです。

今回、富士山測候所の活動と歴史を地元御殿場市そして富士山御殿場口登山道、御殿場商店街等を背景に、現役の富士山測候所員をはじめ元測候所員、物資の搬送はもとより測候所員の精神的な支えであり、あるときは生死を共にした強力や馬方衆、冬の登下山において少しでも安全を確保するために改良に改良を重ねた雪上車の技術者、山頂のモーレッツな風雨や積雪にも耐えうる測候所の建設にあたった地元大工、測候所員の健康と安心した山頂での生活を送るための食料の確保を行った御殿場商店街の人々、山頂に勤務する測候所員の怪我や急病に対応した地元医師など富士山測候所に携わった人々は数えきれない数になるのではないのでしょうか。

富士山測候所レーダーが撤去され、気象観測のシステムが高度化されていくなかで、その役割が静岡レーダー(牧之原)や長野レーダー(車山)、名古屋レーダーなどによって補われ、より精度の高い気象観測が行われるようになりました。平成16年9月末をもって富士山測候所による有人気象観測も終了し、自動観測による観測が今後継続されていくわけですが、私たちは富士山測候所が担っていた観測と活動の歴史を忘れることなく記憶として残し、後世に伝える必要があると思います。

VI. 「富士山測候所展」 出品目録

●主な展示資料

テーマ1. 富士山での気象観測の始まり

日本の気象略年表

テーマ2. 富士山測候所の果たした気象観測

富士山測候所建設関係資料

- 外山 清氏所蔵……………山頂観測所建設当時の写真帳
- 和光 弘氏所蔵……………山頂観測所建設当時の写真帳

御殿場駅前商店会関係資料

- 和光 弘氏所蔵

駅前商店街の絵図（昭和2年発行）・松屋旅館のはっぴ・岳麓デパートのはっぴ・「富士登山音頭」額と掛軸・馬車鉄道写真・富士山の形をデザインした木箱盆

富士山測候所観測機器、登山用具関係資料

- 御殿場市教育委員会所蔵……………観測機器・医療機器・無線電話機・登山具・防寒着等

テーマ3. 富士山測候所を支えた人々

野中 至関係資料

- 佐藤 昭氏所蔵……………芙蓉日記・野中山写真・野中至を称える歌とビデオ

外山 竹二郎関係資料

- 外山 清氏所蔵……………富士山頂観測所建設に対する中央気象台長からの感謝状（昭和16年）・外山竹二郎と大工たちの写真
- 和光 弘氏所蔵……………外山大工のはっぴ・ピッケル

富士山測候所員関係資料

- 芹沢早苗氏所蔵……………ピッケル・カメラ・富士山頂写真・気象百年史
- 伊倉範夫氏所蔵……………気象庁からの感謝状（平成10年6月1日）
- 芹沢茂嘉氏所蔵……………富士山測候所建設当時のブルドーザ写真
- 神戸良市氏所蔵……………ピッケル
- 大胡田警吾氏所蔵……………ピッケル・アイゼン・背負子
- 田代忠作氏所蔵……………山頂測候所に撃ち込まれた機関銃弾
- 勝又好孝氏所蔵……………雪上車用キャタピラのアタッチメントの装着に対する科学技術庁長官からの表彰状（昭和51年4月14日）
- 堀江幸雄氏所蔵……………雪上車改良に対する東京管区気象台長からの感謝状（平成元年11月1日）
- 平井泰世氏所蔵……………ピッケル・アイゼン・登山靴
- 富士山測候所アマチュア無線クラブ……………無線機・交信カード・交信記録簿
- 富士山測候所御殿場基地事務所所蔵
- 富士登山駅伝たすき・駅伝冊子・選手名簿・『富士山頂 有人観測72年の歴史』

テーマ4. 富士山測候所を引き継ぐ

富士山測候所から気象レーダーへ

あとがき

本館の特別展である「富士山測候所を支えた人々」は平成16年9月18日から10月24日にかけて行われました。

今年度が有人観測終了の年ということに鑑み、企画したものです。

この特別展を開催するにあたり、富士山測候所御殿場基地事務所をはじめ、静岡气象台、御殿場市教育委員会等の方々には貴重な資料を提供して頂いたり、色々と便宜を図って頂きました。また、元測候所員諸氏、強力・馬方の皆様、野中至ゆかりの佐藤昭様、測候所建設にかかわった外山清様、雪上車改良の堀江幸雄様には御多忙中にもかかわらず快く聞きとりなどの取材に協力して頂きました。また、和光弘様には測候所建設当時の御殿場の街の風俗等に関する資料を提供して頂き、滝沢所長様をはじめ、現測候所員諸氏には「現役の想い」ということでアンケートに協力して頂きました。

このように、多くの皆様の御支援、御協力の結果、厚みのある充実した展示会を催すことが出来ました。各メディアも注目し、新聞の報道はもとよりテレビでも放映されたため、期間中の来館者数は例年を大幅に上まわり、好評を博しました。これも偏に御協力して頂いた皆様のお陰と紙面を借りて心底より厚く御礼申し上げます。

ただ、当方聞き取り調査が不慣れな上、限られた時間内で発表しなければならなかったため、取材に応じてくださった方々にとり、自分の意図したことと異なる内容や失礼な表現の部分が合ったかもしれません。そのような点がありましたら、ぜひお許しください。

さて、70余年継続し、わが国の天気予報等の正確性に多大な貢献をした富士山測候所の有人観測が終了し自動化へと転換していくことは科学の進歩であり喜ばしいことです。ただ、苛酷な厳冬期も日本一の高さの剣ヶ峰で奮闘する誇り高き男たちの姿がもうないと思うと、富士山頂を見上げる気持ちに以前に比べてなげか空虚感が伴います。これは下界で安穏な日々を送って来た俗人の単なるロマンチズムに過ぎないのかも知れません。

終りになりましたが、長きにわたり、富士山測候所の運営を陰に陽に支えて来たすべての方の労を改めてねぎらうと共に心より感謝申し上げます、あとがきとします。

<協力者> (順不同敬称略)

気象庁東京管区气象台・富士山測候所御殿場基地事務所・静岡地方气象台・御殿場市教育委員会
佐藤 昭・外山 清・和光 弘・芹沢早苗・長田昭典・伊倉範夫・芹沢茂嘉・神戸良市・大胡田馨吾・
田代忠作・永井 亨・勝又好孝・堀江幸雄・平井泰世・中島 博・横山英三郎

<参考文献>

「気象百年史」「気象百年史資料編」日本気象学会発行・「富士山測候所」富士山測候所創立50周年記念発行・「創立60周年記念文集」富士山測候所発行・「カンテラ日記」中島 博著・「富士山測候所物語」志崎大策著・「芙蓉の人」「凍傷」新田次郎著・「芙蓉日記」野中千代子著・「富士山頂写真集」芹沢早苗著・「静岡県史」・「御殿場市史」・「新田次郎」富士山資料館資料集

裾野市立富士山資料館

名誉館長	渡辺 徳逸
館 長	藤森 秋親
学 芸 員	井上 輝夫
指 導 員	塩川 敢
	渡辺 節代

富士山測候所
—日本の気象観測を支えた人々—

平成17年3月25日 印刷

平成17年3月25日 発行

●編集／発行 裾野市立富士山資料館

裾野市須山2255の39

TEL 055(998)1325

●印刷／合資会社 コウワ印刷 TEL 055(992)1349